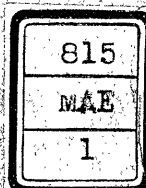
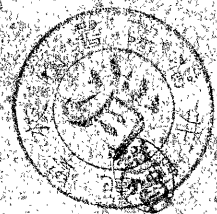


前波伸尾著

日本語典

全

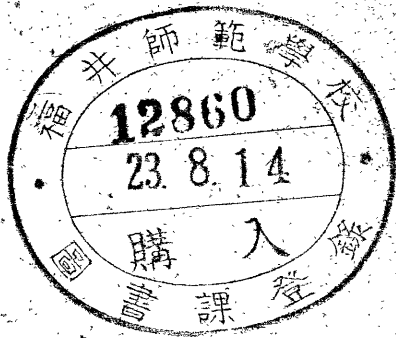
鳳文堂發行



前波仲尾 著

日本語典

全



好日文庫

はしむき。

いま、この小冊子を世に公にするについて少しくいうておきたい
こともあはる。

いうまでもなく、この書は、

明治の御世の口語の語典

である。

さて、この語典を書いたわけは

國語には活用のないこと。

動詞にも、形容詞にも活用のないことを明したいからばあり
である。

といった、これまでの文法といへものは、あれは五十音連圖の

語法で、國語の語法とはいはれまい。しるに、この五十音連圖の約束をいまだに解脫しえないとはわれながら、なんと、なごけないことではないか。

そこで、この書はあの連圖には少しもたよらないで、

動詞の分類を一新し、

形容詞の組織を一新し、

副詞の組織をも一新した

つもりである。

しかし、大家の廬を知らないで、典據のおびえたのまゝないからには、いづれ誤謬のないとはじぶんでも信ぜられない。そこはいくへにも世の批判を仰ぎたいのである。

ただし、なるだけ輕忽な判斷のすくないようにと、

時のうへから、今のと中古のと、

所のうへから、關東のを關西のと

比較して、時、所の二方面からいくらか研究したつもりである。

ともかく、國語法格の全体にわたっていますこの研究を重ねたうへでこの書をかくつもりであったのに、つい著者のつごうからかくは零細なものを世に出すこととなつたのはいかにも残念のまじりである。

しかし、品詞を論ずるにも、

その詞の性質をあらと、

その詞の職能からと、

その詞のくつからと

この三方面からして説明し、解釋し、判定したつもりである。

ただ、活版所のつごうもあるし、著者のさしづめへも重なって
校合などのいきとどかなったのは、これはいづれ再版の期を
まて訂正するつもりである。

明治三十四年三月五日

まえは　な　お

日　本　語　典。

目　録

一、總　説。

一、國語をくみたてる要素。

二、詞の體。

三、詞の用。

四、時のうへの變遷。

五、所のうへの轉訛。

六、國語の位置。

七、研究の方法。

二、詞　論。

一、名詞。名詞の分類。その姓、數、格。

一　四　八　二　一　三　一　二　五

その總説。

二七

二、代名詞。代名詞の分類。その姓、數、格。

その總説。

四二

三、形容詞。形容詞のはたらき。そのくつ。その意義。その沿革。その總説。

五四

四、動詞。動詞の分類。そのくつ。その相。相の沿革。その總説。

七一

五、てには。

一五五

六、副詞。副詞のはたらき。そのくつ。その意義。

一五九

その沿革。その總説。

一六九

七、接續詞。

八、感動詞。

一七二

九、くつとあむり。

一七三

三、文論。

一、文の形式。

一七八

二、様式の三様。

一八一

三、約束語。

一八六

四、分詞のこと。

一八七

五、詞、句、節、文。

一九〇

六、文の主部と屬部。

一九二

七、文のくみあはせ。

一九五

八、文體の別。

一九八

九、詞を逆にならべること。

二一四

十、詞をはぶくこと。

二一七

目錄終

日
本
語
典

總說
一。

國語をくみわたる要素。

わが國語には、せめていうと、

語根と、

くらと。

てにはと

この三ツしかないのである、國語をくみわたる要素というては。

語根。

物す。

このやすは語根である。やすいとしても、やすくとしても、すこしもか
わらないから、このやすというところだけは。

二、くつ。

やすいしな。

このやすいのいは、形容詞をつくるくつである。さてこのやすいは名詞しなをば約束してぞる。

やすくうる。

このやすくは副詞をつくるくつである。さて、このやすくは動詞うるをば約束してぞる。

かくて、語根をば化して、一つの詞としたてゐるのは、このくつのはたらきである。

三、てには。

やすいしなをうる。

このをはてにはである。さて、名詞しなと動詞うるをばつないで、他動の意をばあらはしてぞる。

かくて、名詞と動詞をつないで、さて、その關係をあきらかにするのは、このてにはのはたらきである。

されば、わが國語の研究には、なにはさておいても、

詞のつくりかたをばくつからと、

詞と詞の關係をばてにはからと、

この研究も、きはめて、國語の真相をしるのに必要ではあるまい。

總説 二。

詞の體。

わが國語では品詞の別をば

くつと、

くらゐと、

てにはと、

この三つの、詞の體からも、區別をたてることも、おぼたせらる。

一、くつ。

やすいしなをおう。

このやすいは形容詞である。いという形容詞のくつをばはらへておう。

やすいのをおう。

このやすいのは名詞である。のという名詞のくつをばはらへておう。

やすく。

やすくおう。

このやすくは副詞である。くという副詞のくつをばはらへておう。

よめて、品詞の別は詞のくつからでもみわけおうのである。
よめて、このくつは語根をば化して、一の品詞としたるためのもの
である。

二、へんおう。

やすいしなをおう。

このやすいは形容詞である。名詞しなのうへにすわつておう。

こまのしなをやすい。

このやすいは動詞である。名詞しなのうたについておう。

しなをやすくおう。

この**やすい**は副詞である。動詞うのうにすわつてま。
 かくて、品詞の別は詞のすわるくらゐ からでもみわけあつての
 ある。

すべては、したにつく詞はうにすわる詞に約束されるのあ、わ 國
 語のをよりである。

三、てには。

こちらのしながやすい。

この**やすい**は動詞である。てにはがのしたよすわつてま。
やすいのを う。

この**やすい**のは名詞である。てにはをのうについてま。
あつて、てにはのしたよつてのは動詞で。うへよすわるのは名詞で
 ある。

さて、このてにはは、名詞と動詞をつなぐためのものである。

されば、わ 國語の研究には、なんと。

詞のはくくつ、

詞のすわるくらゐ、

詞のもつてまは、

この研究も なんと必要なことではあるまい。

總説 三。

詞の用。

わが國語では品詞の別は

いみと、

はたらきと、

おかる、詞の用からも、區別をたてることもできる。

一、いみ。

しなもの。

このしなものは名詞である。ものの名となることは名詞である。

やすいしなもの。

このやすいは形容詞である。性質をいひあらはす詞は形容詞である。

やすいしなものをかう。

このかうは動詞である。動作をばいひあらはす詞は動詞である。

しなものをやすくする。

このやすくは副詞である。程あひをいひあらはす詞は副詞である。

あつて、そのいひあらはすいみからでも、品詞の別はみわけがつくのである。

二、はたらき。

やすいしなもの。

このやすいは形容詞である。名詞しなもの、意義をば約束してゐる。

しなものをやすくする。

このやずくは副詞である。動詞うるの意義をば約束してゐる。かくて、約束する詞は、きつと、約束される詞のうへにすわるのやわや國語のきまりである。

されば、わが國語の研究には、ぜひとも

その詞のいひあらはすいみと、

その詞のつとめるはたらきと、

この研究のぜひとも必要なことではあるまい。

總説 四。

時のうへの變遷。

わが國語はたゞず變遷してきた。いさもげんに變遷してゐる。いづれ、こののちも變遷していくにちがひはあるまい。かく時代につれて變遷するからは、國語の語法とて、時代によつて變遷があるはずである。いまだあるという詞でこの變遷の例をばしめよう。

よいしなである。

よいしなであります。

よいしなでござります。

いまでは、おふにちがふのいひぶりである。

よいしなでござります。

よいしなでござる。

これは徳川時代のである。

よいしなよてさうらう。

これは足利時代ので。

よきしなよてはべり。

これは藤原時代ので。

よきしななり。

これは奈良時代から藤原時代のほどのいひぶりである。

いかに、こののであるという詞の變遷し、沿革したもようをみて、時代の考も國語の研究にはきはめて必要なことでもあらう。

總説 五。

所のうへの轉訛。

國語は時代につれて變遷するからには、おなじい時代にでもかつきりとは國語も一定してをらないことはいうまでもなからう。

し、どの時代にでも正しい標準の國語も一きつとある。その時代の多數の國民もつもうて、さて、教育のあるひとびともつもうてはぐらないことばも。

たゞ、わが國では、中古から、幕府もできてから、わが國語にも二中心もできた、京都を標準としての關西と、江戸を標準としての關東と。

いまおはしますという詞もこの二中心でそれらのかはつた發達をしたしだいさばはなさう。

京都を中心としての關西。

一、*owashimas.*

江戸を中心としての關東。

(一) *gozar.*

「*owashimas*」の「*owashi*」は漢字に於て「御座」と書いたの「*owashi*」音讀して「*owashi*」動詞の「*owashi*」は「*owashi*」御座る」というふうになつたのである。

(二) *gozarimas. gozarimasr. orar. gozarimas.*

これは江戸の「*gozarimas*」京都の「*gozarimas*」である。

二、*omashimas.*

これは「*omashimas*」の「*omashi*」は「*omashi*」である。

三、*omas.*

これは「*omas*」の「*oma*」は「*oma*」である。

したの「*os*」

四、*os*

(一) *gozaimas. gozaimasr.*

(二) *gozais. gozaisr.*

gozais. — goans. — gans. — gas.

これは「*gozais*」の「*gozai*」は「*gozai*」である。

(三) *gozais. gozaisr.*

gozais. — gozaisr.

(四) *gois. goisr.*

gois. — geis. — ges.

(五) *gos.*

「*gos*」

(五) りんご。 gons.

(六) りんご。 gos.

なほ、この「りんご」を「りんご」として「りんご」の「りんご」

一、りんごのりんご。 de omas.

二、りんごのりんご。 de os.

三、りんごのりんご。 dos — das.

(一) りんごのりんご。 de gozarimas.

(二) りんごのりんご。 de arimas.

de arimas. — arins.

(三) りんごのりんご。 des.

なほ、この「りんご」を「りんご」として「りんご」の「りんご」

なほ、この「りんご」を「りんご」として「りんご」の「りんご」

なほ、

(一) りんごのりんご。 de arimas.

(二) りんごのりんご。 de ar.

(三) りんごのりんご。 dia.

この「りんご」を「りんご」として「りんご」

四、りんごのりんご。

Takai mono ia.

なほ、この「りんご」を「りんご」として「りんご」の「りんご」

なほ、この「りんご」を「りんご」として「りんご」の「りんご」

なほ、

(一) りんごのりんご。 de ar.

(二) りんごのりんご。 da.

このだはおもひには、關東のなまりである。

いかに、このおはしやすという詞一ツも關東と關西とに、いかに轉訛し、沿革したかをみてゐても、わづ國語の研究には、かの時、所の考もまことに必要なことゝおもはう。

總説 六。

國語の位置。

世界の言語も發達してきたあとをば、言語の構造のうへにおもひしごとく、
てみると、いままでには、

孤立語、

加添語、

活用語、

この三段の發達のしなみもあるのである。

さて、そのむかし發達したのは孤立語で、この系統の言語の特異な
ところは、

ことばはまづ語根しかない、

ということである。

この孤立語のよい例はシナ語である。

語根。

大。

この大の字は、形容詞となつても、副詞となつても。はた、名詞に、動詞にしても、そのかたちはすこしもおはらないのぢ、そこぢ語根であるというしるしである。

大國。

この大は形容詞である、名詞國のうへにすわつて、その意義をば約束してゐるぢぢ。

國大兵衆。

この大は動詞である、國という名詞のしたにすわつて、さて、その状態をばあきらかにしてゐるぢぢ。

頼大凌小。

この大は名詞である、頼という動詞のしたについて、さて、その客

となつてゐるぢぢ。

敵兵大敗。

この大は敗という動詞を約束してゐるぢぢ、副詞である。

かく一ツの詞で、どの品詞のはたらきをもちとめるところぢ孤立語のしるしである。

さて、加添語というのは、もとこの孤立語のぢぢをば一たびはとほつてきたらしう。

この加添語であるわぢ國語の、ぢの孤立語のシナ語とちぢうてゐるところは

くつ、

てはは、

この二ツぢ發達してゐることである、語根のほかは。さて、このくつやてにはのゑるところぢこの加添語の特異なところである。

語根。

たほき。

この語根おほきにくつをはかせて、形容詞なり、副詞なり、はた、名詞をも、動詞をもつくるのである。加添語のわづ國詞では。

おほきなくに。

くにといい名詞のうへにすはつて、その意義を約束してをるから、このおほきなは形容詞である。さて、なという形容詞のくつをばはいてをる。おほきなのをたのむ。

これは名詞のくつのをばはかせて、形容詞おほきなを名詞にしたのである。さて、名詞であるからてにはをのうへにすわつてをる。

くにもおほきい。

このおほきいは動詞である。名詞くへの状態をばあらはしてをるから。さて、動詞であるから、てにはがのしたについてをる。

おほきにまけた。

このおほきには副詞である、にという副詞のくつをばはいてをるから。さて、動詞まけたのうへにすわつてをる。

かくて、一ツの語根にそれぞれのくつをばはかせて、それぞれの品詞にしたてるのも加添語のしるしである。

また、加添語ではてよはで詞と詞の關係をあらはすのを、かの孤立語では詞のすわるくらゐであらはすのである、詞と詞の關係をば。詞のすわるくらゐであらはすシナ語。

大敗敵兵。

この敵兵は動詞敗の客である。敗のしたについてをるから。

敵兵大敗。

この敵兵は動詞敗の主である。敗のうへにすわつてをるから。かくて、名詞の主、客はうのくらゐできまるのである。

てにはであらはず 國語。

てきのいんちを おほきにまゐした。

てきのいんちが おほきにまけた。

わが 國語では、あつて、を、がで主、客のはたらきをばいひあらはすのである。

かうしてみると、このくつやてにはの研究は、きはめて、わが 國語の研究には必要なことではあるまい。

さて、もの活用語というのはこの加添語のさらに發達したものであること、ものくつも語根に化合してゐることなどはここにはいう必用もないであらう。

總説 七。

研究の方法。

いま、わが 國語をば研究してその真相をばしるには、その法格をばあらわにするには、まづ、比較研究よりよい方法はあるまい。

さて、その比較研究はいかにして、どこから手をつけるかといふと、まづ、

一、詞のつくりかたをば、

(一) 詞のはくくつのうゝと。

二、詞と詞の關係をば、

(二) 詞のもつてははのうゝと。

(三) 詞のすゐるくゑのうゝと。

(四) 詞のつとめるはらひのうゝと。

(五) 詞のいひあらはすいみのうゝと。

この二條、五項から研究するの必要領を以てはさるまい。

一、時のうへの變遷と、

二、所のうへの轉訛と、

この二方面からして比較研究したならば、いかにわが國語が沿革して、

さて、いまのさまになつたかという真相がわかるであらう。

しかし、わが國語を研究するに、なにはともあれ、ここを以てせねばならぬこととで、また、いつでも研究者の念頭をはなれてはならない

大本領は。それは、

わが國語は加添語である、

ということである。

名詞の分類一。

名詞には

固有のと。

普通のと。

この二つの別がある。

一、固有の。

この固有の名詞は意義のない詞である。

クスノキ マサシゲ。

ミナトガワ。

コンゴウサン。

明治。

イケズキ。

めぐることはそのものにつけた符號で、意義を欠いてゐる、類の名

稱でないもの。

二、普通の。

この普通のは類の名稱で、通有の意義のある詞である。

ひと。

やま。

かわ。

うま。

かかる普通名詞には姓、数の別がある。しかし、格は固有のものもある。また、固有の普通のひきなほすこともできないでもない。

あれわいものクスノキである。

あつむるときにクスノキは兵家などという普通名詞にうつたのである。

名詞の分類二。

名詞は、さらに、その形體のうへから、

有形のと、

無形のと、

この二とほりにわけられる。

一、有形名詞。

この有形のは覺官にうつるものの名である。

ひと。

ふね。

二、無形名詞。

この無形のは覺官にはうつらぬやまなどの名である。

やまのうへはげし。

これは語根なむにさというくつをばひせて無形名詞にしたて

たのである。

はたらち がある。

Hataraki ga ar.

これは動詞 Hatarak に^るいふは^をせて無形名詞にしたたのである。

みり がある。

mie wo kazar.

これはみという動詞に^るを^をせて無形名詞にしたたのである。

名詞の姓。

名詞の男女姓をあらはすに、

ありでするのと、

るでするのと、

あるとあるたことをするのと、

この三種類のある、る、ある。

一、あるとあるたの。

てい。 はな。

おう。 めい。

二、るであるたの。

むし。 め。

ある。 Ane. ある。 Ane.

三、あるた、ことをの。

ある。 ある。

このある、ある。

姓と通有するの、

あると姓のなるの、

もおほくある。

四、姓を通有するの。

おや。

きょうだい。

五、姓のないの。

ふね。

ころね。

しづし、この姓の別はわづ國語にはさまで、發達せないでしまった
されば、せひに、姓をいひあらはせねばならないときには、おほくは、形容
詞であるのである。

おとこのこ。

おんなのせんせい。

しづし、つうれいはあそびのつづきありから、この姓の別はたいい
に推料するのである。

名詞の數。

名詞の數には、

單數と、

複數と、

この二とほりの別もある。

一、單數の。

ひと。

くに。

二、複數の。

ひとびと。

くにぐに。

これはおなじい詞をひきねてつくつた複數名詞である。

おやたち。

こどもし。

おとこども。

おんなら。

これはくつをはきせてつくったのである。またまるで数のない名詞もある。

おくもん。

はたらき。

この数の別もさまでわが國語には發達せないで、いまは單複を混用してゐるほどである。

あのひとにわこどももひとりあひ。

このこわわたしのことだちである。

それで、ぜひに數をいひあらはさねばならないときには、つうれい、形容

詞か副詞かどちるのである。

形容詞であらはすの。

おうくのこども。

ひとりのむすめ。

副詞であらはすの。

こどももおうくあひ。

むすめもひとりあひ。

しつうれいはあんなおのつうめりも、この数のことはおぼむたに推料するのであひ。

名詞の格。

名詞は動詞のうへにすはて、さて動詞の

主格に、

客格に、

この二とほりのはたはをばつとめ。

一、主格。

この主ということば、動詞のいひあらはす動作なり、状態なりの主體
ということである。

こどもがおる。

とりがなく。

この主格を明すてにははがである。

しめし、うちけしのとぎにはこのおむわにおはる。

こどもわおらぬ。

とりわまだなかぬ。

さて、同主格をあらはすにはてにはでるは、でわをもちぬ。

このとりわにわとりである。

このとりわにわとりでわない。

二、客格。

この客格は動作をうける客體のことである。

ほんをよむ。

とりをかう。

この客格を明すてにははをである。さてうちけしのとぎにはこの
てにはをばわにかわる。

ほんわよまん。

とりわかわん。

しめし、希望のころをあらはすには、客格のてにはをばがにかわる。

おもしろいほんがよみたい。
よとりがほしい。

名詞の總説。

名詞をば體、用の二方面から研究してみると、

一、體からみると、

(一) 名詞のくつをばいてみる。

Kan-o,

すべて金屬はうてばかん Kan となるから、そのおとをうつして、をて、それに名詞のくつをばはめて名詞にしたたのである。

Fu-o.

これはふゆのおとふにえをばはめて名詞にしたのである。いまでも氣笛の聲をば關東、西でフウになるというてゐるではないか。

しかし、名詞のくつはいづれもみな語根に化合してしまつたのもおほい。

(二) てにはのうへにすわる。

おもしろいはなしである。

おもしろいはなしがある。

おもしろいはなしをする。

かくて、名詞を動詞につなぐてにははで、が、をである。

二、用からみると。

(一) 動詞の主にも、客にもなる。

ねずみがおる。

ねこもねずみをとった。

(二) 形容詞に約束される。

おもしろいはなし。

おうきなねずみ。

かくて、名詞はその體からでも、用からでも他の品詞とは區別がある。

さて、この名詞は他の品詞へ歸化していくこともある。

一、形容詞になるの。

いしのとり。

きぬのきもの。

うひのひきだし。

ひびきのうら。

これは名詞も、形容詞のくつをばはいて形容詞にかはったのである。

みずぐさ。

かねもち。

これは合成名詞で、うへの名詞は形容詞の性質をとったのである。

二、動詞になるの。

ことをはらむ。

このはらむは、名詞はらに動詞のくつむをはかせて動詞にしたてた

のである。

ふねをつなぐ。

このつなぐも動詞のくつぐをはめて名詞つなを動詞にしたたのである。

また、他の品詞から名詞に歸化するのがある。

一、語根にくつをはめての。

おとしをはめる。

おとしもある。

このみさは無形名詞をつくるくつである。

二、形容詞から歸化するの。

おうきなのをこうた。

ここにいいのがある。

やすいのでよろしい。

こののは形容詞から名詞をしたたるときにくつである。

三、動詞から歸化する。

しりをする。

Tsuri wo sur.

これは動詞Tsurにiというくつをはめて名詞にしたたのである。

かれをする。

Kir-e wo kaw.

このKineが動詞からKirにeをはめて名詞にしたたのである。

あそびのをする。

こののは動詞を無形名詞にするくつである。

ある品詞は互に融通することもあるものである。

代名詞の分類

四四

代名詞をば分類してみると、

人のと、

物のと、

所のと、

問のと、

この四とほりの代名詞がある。

一、人の。

(一) 自稱の。わたし。ぼく。わがは。い。

(二) 對稱の。あなた。きみ。おまえ。

國語には第三者をさす代名詞はない。つうれいはものの代名詞をかりて用を辨じてさる。

あれ わたしのおとうとである。

また、あのひと、あのかたなど形容詞をかりて第三者をいひあらはすことはあらためていうまでもない。

また、自、對を併せていうのものもある。

おたがいおわるおった。

二、物の。

一、近稱の。これ。

二、遠稱の。それ。

三、不定稱の。あれ。

三、所の。

一、近稱の。ここ。

二、遠稱の。そこ。

三、不定稱の。あそこ。

四、問の。

- 一、ひとの。 だれ。
- 二、ものの。 なに。
- 三、ところの。 どこ。
- 四、ときの。 いつ。
- 五、取捨の。 どれ。どっち。
- ごちらもきみの。
- きみわどれおもうの。

代名詞の姓。

わが國語の代名詞には姓の別がないというてもよい。ただ、慣用のうへからいくらかはないでもない。

一、男女ともにつかうてゐるの。

わたし。

あなた。 おまえ。

二、男ばかりつかうて、女のつかはぬの。

ぼく。 わがはい。

きみ。

代名詞の數。

代名詞の數のつくりかたは、さして、名詞のともひはない。

一、單數の。

わたし。ぼく。

きみ。あなた。

二、複數の。

一、くつをはかせての。

わたしら。ぼくら。

きみたち。あなたがた。

二、ことばをかさねての。

われわれ。

三、單、複數に共通するの。

わがはい。

代名詞の格。

代名詞の格は名詞のにおなじい。

一、主としての。

わたしがい。

二、主とおなじい格としての。

きのうきみをたずねたのわたしである。

三、客としての。

きのうきみをたずねた。

しかし、代名詞の主、客はつうれいははぶくこととおほい。さて、詞のたらぬふしは前後のつづきあひからたいていは推料するのである。

あしたあそびにこないか。

うん、いこう。

かく、わたしはいこうといはぬが、いである。

きみのとけいはどうしたか。

ついこのあいだおとしてしまった。

かく、ついわたしわあれをおとしてしまったといはぬが、うれしいである。

この、代名詞の主、客をば例としてはぶくことはわが、國語の一々の特点であらう。

しかし、ぜひに提醒していはねばならぬときにははぶが、ずにいひあらはすこともある、代名詞の主、客でも。

きみがくるが。

いや。わたしわいがぬ。

きみのおとうとをつれていこう。

いや、あれわつれていがれぬ。

代名詞の總説。

代名詞はのというくつをばはいて形容詞に歸化することもある。

わたしのこがたなである。

これはだれのしもつが。

しよもつ、こがたななどという名詞を約束するから形容詞である、このわたしの、たぎのは。

代名詞からでた形容詞にはまたお、ごなどいうもある。しかし、それはかむりとしてつかうてゐる。

おなまえわ。

このおはきみのというにおなじい。

ごせいめいわ。

このごきみのせいめいというにおなじい。

このお、ごなどは對稱のときに、第三者にのみかざりてつかうよう

である。お、むかしは**第三者**にもつかうたものとみえる。

みかみはみひたひにいはせり。

ここでは**その**かみをば**その**ひたいにというにおなじいところである。代名詞はまたのというくつをばはかせて**名詞**としてつかうことがある。

きみのをがしてくれ。

これわわたしのである。

すべて、形容詞にのをはかせれば**名詞**になるのである。

やすいのをこうた。

このきまりで代名詞からでた形容詞をも**名詞**にしたたお、ただの**お**もなるからその「」をばはぶいたのである。

あなたのをみせてください。

わが國語では代名詞は十分に發達せなんだ。

さて、代名詞の、**名詞**とちがうところば、

一、代名詞の**主**、客ははぶくこともおほい。

二、代名詞は**形容詞**に約束されることはない。

この二條も**名詞**とちがうところである。

形容詞の意義。

五四

形容詞をばそのいひあらはす意義から分類すると、

形の、

質の、

数の、

程の、

指定の、

この五つとほりの別がある。

一、形の。

この形といううちには色もこめてある。

ちいさないね。

しろいねずみ。

二、質の。

この質のといううちには材料の、方角のをもこめてある。

こうちつなきつね。

てつのふね。

ひびきのそら。

みぎのて。

三、数の。

たぐまんのこども。

うさぎのななね。

三の数のといううちには量のをもこめてあることはいうまでもない。

四、程の。

ひそひそめ。

できにくいうだん。

五、指定の。

このしもつわたしのでない。

この、あのなどは代名詞からでた形容詞である。

形容詞のはたらき。

名詞のうへよすわつて、その意義をば約束する詞は形容詞である。

たかいやま。

おほきなかわ。

また、形容詞は形容詞のうへよすわつて、その意をば約束することもある。

たいしたたかいやま。

めずらしいおほきなかわ。

形容詞のくつ。

形容詞はつうれいは形容詞のくつをばはいてぞ。さて、そのくつと一
ては、

な、

さ、

い、

の、

この四、いまはもちゐられてぞ。

一、な。おうきないぬ。

ゆうそうなはなし。

このなはむかしはなるというたのむかしは變遷したものである。

二、た。

ふとったひと。

し、かりしたおおいき。

とんだまぢい。

このたはむかしはたるというたのむかしは變遷したものである。

三、う。

うつくしいけしき。

ちいさいいぬ。

このいはむかしはまというたのむかしは變遷したものである。

かく、變遷というくつをばくものは形容詞というところをばらして、
關西ではかういうようなことをいうてぞ。

麗綺ひと。

可愛こ。

これは語根そのものゝいでとめてあるのを、それを形容詞のくつと
とみたてたのであらう。

しかし、關東ではかうはいはないで、

綺麗ひと。

可愛こ。

と形容詞のくつないをただしくはめてつめてゐる。

四、の。

わたしのいぬ。

あなたのしゅう。

これはもとをただせば代名詞からでたものであるが、かく歸化したうへは形容詞としてあつてよくあらう。

形容詞の沿革。

そのむかしは形のうへではこれぞ形容詞というほどのものはなかつたらしい。つまり語根をのみならべてゐたものとみゆる。

一、語根ごばそのまゝ形容詞としたの。

かねもち。 Kane-mochi.

やせいぬ。 Yase-inu.

このかね、やせなどいう語根そのままで、なにも形容詞らしいところはずこしもない、その形のうへからは。ただ、名詞をば約束してゐるから形容詞としてあつたのである。

ある語根そのまゝをならべたものは熟語としておきつらねたものあらう。

これがいまが發達して形容詞らしくなつてきたのは、

二、うごちる語根をかくての。

かなだらい。 Kana-darai.

たにがわ。 Tani-gawa.

やせおとこ。 Yase-otoko.

かく音もあつたのは發音の容易なほうへなつたのではあるが、また、語根もすこしく**形容詞の形**をとるようになるはじめかといふはれる。

これもやめて發達してよいよたしかな形容詞の形をとるようになるのは、

三、こつおはなかつの。

かねの ひばか。 Kanemo hibaci.

やせた やせこ。 Yaseki otoko.

やせい やせこ。 Yaseki otoko

かくて、形容詞ははじめただしくその形をそなへたのである。

かくてその形をば時のうへから比較してみると、

なみむすの。 しまの。

ちいなる ことな。 ちいかな ことな。

ちいぢい ことな。 ちいぢい ことな。

やせたる ことな。 やせた ことな。

ひのはな。 ひのはな。

わがきみ。 わがきみ。

あかい ことな。

このいとしういしはななでななですたれた。かのがだけはいまもすこしなのことな。いし、これとしてもあたらしく形容詞をつくるにはあからなななよしくあな。

形容詞の総説。

形容詞もその体からと、用からとこの二方面からして解釋せねばならぬ。

一、體からいうと、

(一) 形容詞のくつをばはいてゐる。

いやらしい奴。

(二) 名詞が、形容詞のうへにすわつてゐる。

あるひと。

そのあるは形容詞のくつははいてゐるが、名詞のうへにすわつてゐる。

二、用からいうと、

(一) 名詞が、形容詞の意義を約束してゐる。

かわいらしい ことだ。

このかわいらしいはことだの意義を約束してゐるから、ただことだと
いうよりもいみはましてきた、しかし、その應用の範圍はせまくな
つてきた。

(二) 形が、質が、數が、程が、指定がの意義をばあらはして
ゐる。

そのいぬ。

このそのは形容詞である。一、指定の意義があるからして。二、名詞
いぬの意義とは約束してゐるからして。三、のという形容詞のくつを
ばはいてゐるからして。

かくて、わが形容詞はその體からみても、用からみても形容詞の特質
があるのである。

さて、この形容詞は活用などいうことはけして、けしてないことであ
る。

よきしなをうる。

よいしなをうる。

このよいは形容詞である、いというくつをばはいて、名詞しなをば約束してゐるから。

しなをよくうる。

このよくは副詞である、動詞うるを約束して、さて、くという副詞のくつをばはいてゐるから。

このしなでよい。

このしなでよい。

このよいは動詞である、でのしたよについて、名詞しなの状態をばあらはしてゐるから。

かく、形容詞、副詞、動詞と各異のものをば一とまとめて、まとめて、これのようにクシキ活用の形容詞としても論ずることはいふまでもあらう。

あ。

しなをば、あゐる文はいかに解釋するかというを、

しなをば、あゐる、あぜすずしきよ。

これも活用ではない。そのないというわけは、

Tsiki akak-, kase suzshiki-yo.

あゐるの akak-が形容詞のくつをばはいてたまでのものである。Suzshiki-i の i にあひし。

あひし、これあゐることばになほしてみると、

くしのあゐい、あぜのすずしいよ。

あゐいといふとただしくあらはれてくるものである。

しな一、あゐるれいもだから。

活潑、勇壯なはなし。

これも活潑な、勇壯なというところを、うへ一っだけを略したの

である、語根をばそのまま形容詞として。
されど、すこし異例なものもないではない。

あきたかく、うまこにたるとき。

しかし、このたかくは語根をばそのまま形容詞としてつかうてゐるまでである、まへの活潑あかくなという語根をそのまま形容詞として用ゐたように。けして活用などいうのではないのである。

さて、形容詞はのというくつをばくときは名詞へ歸化することになる。

ふとつたのはみよい。

おほきなのもほしい。

やすいのをこうた。

もとからのをばく形容詞は名詞になつてもづにのをはかぬのである。

わたしのをかそう。

またがをはいてゐる形容詞もづにのをはかせぬで名詞となる。
十せんがせきゆうをください。

この十せんがは十せんだけのといういみである。

また名詞も形容詞のやくをばつとめることもあつた。

はなうり。

よみせ。

みせなり、うりなりのうへにすわつて、さて、名詞の意義を約束してゐるから、このはなやよは形容詞である。

また、動詞から歸化した動詞狀形容詞というもある。

よくへんきようすること。

かく副詞よくに約束されるところは動詞であるけど、名詞こそものうへにすわつて、その意義を約束するところは形容詞である。

二、の品詞のはたらきをばかねてゐるから動詞狀形容詞という。

このんでほんをよむことだ。

このよむは副詞このんでに約束されるところ、ほんという客をいつところは動詞であるが、名詞このものうへにすわつて、その意義をば約束するところは形容詞である。それで、このよむは動詞狀形容詞と
いうのである。

動詞の分類 一。

動詞はその意義のうへから分けて、

動作をあらはすのと、

状態をあらはすのと、

この二とほりの區別がある。

一、動作の。

あめがふる。

てがみをかく。

この、動作をあらはす動詞にはきつてにはが、をがつく。

二、状態の。

きょうわやすみである。

それでよい。

この、状態をあらはす動詞にはきつてにはでがつく。

しかも、この状態をあらはす動詞で、しかも、てにはがをもうの
くつもある。

そこにいぬがある。

そこにいぬがおる。

さうして、この状態をあかす動詞たるに對して。

關東では。いぬもいる。

關西では。いぬもたる。

また、あるに對しては、

どこにもいぬはない。

そこにいぬもある。

そこで、このある、たるについて、その使いようにいま一の習慣が
ある。

いのちもあつてあるものは、

いぬもたる。

いぬもいる。

いのちもないもの、よゝあつてもあるぬものは、

いぬもある。

おうきなきもある。

また、このあるにはそのつかひまたに、さらに、一の習慣もある。

状態をあらはすの。

そこにおうきなきもある。

所有をあらはすの。

きみにわきうだいもある。

さて、この所有をあらはすあるはたるとくらべてみるとそのつかひ
かたもよくわかる。

所有をあらはすの。

あにさんわあるか。

状態をあらはすの。

あにさんわたるか。

しづし、かの状態をあらはす動詞にはいでむすぶのぢりとなほり、のである。

それぢよい。

これでよろしい。

いフジャヤぢいちばんたかい。

このいでむすぶ詞は動詞で、しづも、状態の動詞であるというわけは、

一、名詞のしたにすわるぢ。

においぢよく。

せぢたぢ。

さて、形容詞は名詞のうへにしづつゝな。

よくにおく。

たぢくぢ。

二、このいの沿革ぢ。

くぢの。ぢぢたぢく。 takai.

ぢぢこの。 ぢたぢ。 takasi.

このぢは動詞をつくるくつす s ぢ語根 taka にはめて状態をあらはす動詞としたのである。ちつ、それに ari, s ぢ類推して taka-s-i としたのを、くぢではこのす s ぢぢちつ takai- としたのである。なほ、英、漢と對比してみるに、

The weathe si fine. よう

牛山之樹曾爲美也。うしくく。

このうつくしい、よいのいは英の *is*、漢の 爲にあたるので、うつくし、よはただ語根である。

また、あるも動詞であるから、はないも動詞ではなからう。

このはなにわにおいもある。

このはなにわにおいもない。

てにはもおなじで、くらぬもおなじであるばかりではない。もとはそのあたかもおなじだった。

にほひあり。 *ari*

にほひなし。 *nasi*

かくて、中古文では状態の動詞はみな「でむすんだようである。なほ、わも」國語では約束する詞はきつと、約束される詞のうへにすわるのである。

よいてんきである。

てんきもよくよい。

よし、もとは何でも名詞のうへにすわると、やびて形容詞になるし、

よくはたらくこども。

あるひとあいうた。

もとは何でも名詞のしたにつくと動詞になるのである。

このこどもわよくはたらく。

こういうたひともある。

三、てにはのてんあう、

うしわあちくである。

たふさんにきうだいがある。

はながさく。

かくて、がのしたにはいつでも動詞がすわるのである。

よし、あるは何であらうと、ものないは形容詞である、というならば、

まだはなわさぬ。

まだはなわさかない。

このないはぬとおなじいことばである。されば、このないは形容詞であらうか。ぬも形容詞であらうか。

かのクシキ活用などはまるで國語を誤解したのである。

動詞の分類 二。

動詞をばその意義からさらに分類して、

自動詞と、

他動詞と、

この二とほりに區別することゝせむ。

一、自動詞。

この自動詞といふことは、ひとりにてきむとらうところをあはすの
やあむ。

あはむ。

あひむ。

あはる。

あへて、この自動詞はいつもてにはがまうつのである。

二、他動詞。

この他動ということとはわざにするところ、しかも撰擇をするところをあかすのである。

てがみをかく。

ちがみちをこらる。

よをあかす。

ほんをよむ。

この他動詞はいつもてにはををものつのである。かくて、わが國語では撰擇をする、せぬが標準となつて自他が分れるのである。その所爲が一方に渉る、渉らぬは少しも關係したことではない、わが自他の別には。

もし、が、をがきなるときはををばおろくみて、かの動詞の自他をしるのである。

ねこがねずみをとる。

ねずみをねこがねらう。

なほ、他動のびてにはがをものつことはないでもない。

おもしろいほんがよみたい。

なにがうまいものかほしい。

しかし、これは希望をいひあらはすときにおきるもので、じつはあの状態の動詞にこれはかはつたのである、希望といふところの状態をあかすのであるから。

ある、ある、いるの三つのほかは、状態の動詞はみないでむずぶが國語のきまりである。

されば、この状態の動詞は自他のほかに立つ一種の動詞である。

なほどいらいひとではない。

いぬわけものである。

いちばんフシノヤイがたかい。

ちみころわちみころひじ。

動詞の分類 三。

動作にはその相をかくうし。

正格のと、

變格のと、

この二とほりの區別をてみる。

一、正格の動詞。

まづ、時の相をわけてみる。

ほんぞみる。 mi-r.

ほんぞみた。 mi-ta.

ほんぞみよう。 mi-on.

この「は現在をあかすくいで、は過去を、は未來をあかすくいでである。

二、變格の。

てみをか。 kak.

てみをかいた。 kai-ta

てみをかこう。 .kak-on.

現在をあかすに現在時のくつをわぬところも變格である。しかし、過去、未來のつづけようは正格動詞ともいうことはない。

動詞の相はいくつもある。この時相もそのうちの一つである。さて、このほんの相の付きようにもこの正、變の別は明にあるのである。

動詞のくつ。

名詞には名詞のくつがあるように、形容詞には形容詞のくつがあるように。この動詞にも動詞のくつがあるのである。

(一) く。とどたたく。 tata-k.

このたたはものをうつ音をまねたもので、それに動詞のくつくをばはかせて動詞にしたたのである。

かれをさく。 Sa-t.

このさるものをさく音をかねて、それを語根としてく、をばはさせたのである。

ふねをふく。 Fu-e wo fu-k.

ふとなる音を語根にしたてて、ふて、それに名詞のくつをばはせて、ふね、fu-eという名詞をこころえ、動詞のくつをばはせて、ふく、fu-kという動詞をこころえたのである。

(二) ぐ。 g.

ふねをづなぐ。 Tsuna-g.

これは名詞づなにぐをばはせて動詞にしたたのである。

こぎたなをとぐ。 to-g.

これはこぎのどにくをばはせたのである。

においをもぐ。 ka-g.

これはおののかにぐをばはせたのである。

三。す。 s.

ものをうつす。 utsu-s.

むしは衣をそめるにうつすのは、もしははなをば衣にかねて、そのうへからつちでうてそめたものである。それで、うつという詞からうつすはできたのである。

また、このくぎのいろをぎものに移るから、かれをにせてこれに

たどるぞもうつすというようになったらしい。

四、む。 m.

こゝろ *chisim* hara-m.

これは名詞はらにこゝろむをはかせたのである。

ほろ *yo-m*.

むかしは *chichu* となくとくうし、こゝろをあげること *yo* というたらし。この *chichu* は、おの *yo* に *む* はかせたのであらう。

ひと *aware-m*.

これは感類詞 *aware* に動詞の *く* と *む* をはかせて動詞にしたたのである。

五、る。 r

しやれ *share-r*.

これは漢語 *洒落* に *r* はめて *洒落* ということばをこしらえたの

である。

法令をふれる。 *布令 r*

むかしは法律を布令というたから。布令を一般にしらせることを *布令* というようになった。

なほ、むかしは漢語を國語の動詞にするには *る* をはかせたことになった。

學問の

勉強 *S.*

しかし、漢語から動詞をこしらえる *る* は、やりかたはいまではなくなつて、みなかういうふうになった。

學問 *S-r.*

勉強 *S-r.*

このするは自他の別をあらわすに。しうことである。

あうす。

あうす。

あうす。

あうす。

この自他の別をあらわすに。しうの法である。

Mono ni somar.

Mono wo somer.

詞のなみの母韻を、て自他の別をあらわすのは活用の芽をあらわす。

このるあうす。詞をあらわすはゆゑはいたのである。

あうす。 oboe-r.

あうす。 oboe-u.

さうす。 sakae-r.

さうす。 sukao-u.

(七) う u

かうす。 ka-u.

かうす。 ha-u.

(八) ぶ。 bur.

學者 bur.

紳士 bur. 紳士。

(九) ば。 ba.

あうす。

あうす。

(十) ぐ。 gar.

あうす。

はづかし gar.

これは語根 *gar* の動詞である。

いぢ gar.

これは副詞 *gar* の動詞である。

mi-ta-gar.

みたがる。

これは「みたい」という動詞を「みた」として、それをさらに動詞に「たてた」のである。

(十一) ます。

よゝおほひ ます。

この「ます」は上品な詞づかいとしてのことである。ただし、これも動詞「まつ」である。

oboe-r.

oboe-mas.

かくて、この「ます」はおほひの動詞にしたてまつる。しかし、ると「ます」と。いくらおほひはちがってゐるぬではない。

むしろ、動詞の「まつ」を「たたら」ばまだある。いまはそれまで「まつ」と思つてやめた。かくして、この動詞の「まつ」は大體は語根と和熟してゐたようである。名詞の「まつ」のようには。

Hon wo yo-m.

Hon wo yo-n-da.

Hon wo yo-m-ou.

かくて、これは動詞の「まつ」のうへに、さらに、格の「つ」を「まつ」してまつ。これは語根に「つ」を和熟したからではあるまいか。

それば、まだ和熟してゐるぬ。正格動詞は「まつ」、語根に格の「つ」を「まつ」。

o wo mi-g.

○ wo mi-ta.
○ wo mi-ou

動詞の相。

動詞には

- 一、時、
- 二、使動、
- 三、所動、
- 四、能動、
- 五、敬語、
- 六、否定、
- 七、命令、

この七つの相がある。

さてこの相を表すにはそれぞれのくつがある。

一、時の相。

時の相には

時間に關係する時と、

時間に關係せぬ時と、

この二とほりの別がある。

一、時間に關係せぬの。

これはつうれい現在というてゐるのである。さて、この現在というところはまのあたり見聞することをあらはすのではない。

(一) 眞理をあらはすには現在であらう。

つきわちきょうをまわす。

うしわけものである。

すべて、この現在でいひあらはしたことがらは所、時のうへから制限ない道理である。

(二) 習慣はこの現在でかく。

あのひとわよくはたらく。

からだもよい。

これはさしあたってはむはらぬというところからであらう。

二、時に關係するの。

(一) 進行現在。

これはまのあたり見聞すること、いま現に道引してゐること、いひあらはす相である。

あめもふつてゐる。

ほんもよんでゐる。

ここにも關東、西ですこしくいひあらはしようにも、ちやう。

あめもふつてゐる。

ほんもよんでゐる。

なほ、この進行現在のあらはしむたはすでにすこしく變りかけてゐる。

關東では。

あめもふつてゐる。fu-ter.

關西では。

あめもふつてゐる。fu-tor.

あめもふつてゐる。furi-or.

九州では。

あめもふつてゐる。fu-tion.

これらはいづれもみな、

ふつてゐる。furi-teor.

も、轉じたものであつて。

も、北陸の國では、ちやうど、ふつてゐる。

あめもふつてゐる。fu-tori-or.

これは關東、西のを重ねたものらしい。

そこで、この進行現在には過去のもの、未來のものもある。

過去の。あめがふておった。 fu-teo'ta.

未來の。あめがふてたろう。 fu-teo'ou.

これはうのとぎどきにあることも進行してとったこと、進行してとらうというところをあかしたのである。

この進行現在とあの現在とを混じてはならぬ。

(二) 過去の相。

この過去ということは、その事、爲、いまにつづぬことをあらず相である。

きのうわやすみであった。 a'ta.

おとついわあめがふった。 fu'ta.

たくさんてもみをかいた。 kai-ta.

(三) 未來の相。

これは今からなごのことをいひあらはすための相である。

あすわあめがふころ。 fu'k-ou.

やめてよめあけよう。 ake-ou.

まゝほんごよう。 yom-ou.

さて、未來のことはたしめでないところからたしかならぬこと、推料のころなどはこの未來の相でいひあらはすのである。

それわうちぎのわびやであらう。 ar-ou.

それがよからう。 yoka'ou.

しるに、ここに一つの破格もある。うれは進行現在のことでも、過去のことも、未來のことでも、あの時に關係せぬ現在相でいひあらはすことである。

ひがめがやめをうへ。

おとつらわおぜおふくし。きのうわあめおふるし、このにさん
にちわどこひもでないでおる。
あずくにひかえる。

このにちようにわきとくる。

これわおりに讀むひと聞くひとを聳動させるための一の格であらう。

時の相の沿革。

むかしは時の相に、かの過去、未來、現在ともに。

有期のと、

無期のと、

この二のあらはしかたがあった。

一、現在の。

無期の。

おぜおふく。

ておみおあ。

有期の。

おぜおきぬ。

ほんおばよみつ。

この、有期をおあすつぬはいまじもと、いうほどのころの詞で

ある。

二、過去の。

無期の。

かぜふきき。

ほんをばよみき。

有期の。

かぜふきにき。

てもみをばかきてき。

この有期をあかすに、てはかのつぬの轉じたので、おなじい過去のことなら、いつとその時を指定した詞である。

この有期のは今に近きを明すいひあらはしたである。

三、未來の。

無期の。

かぜふかむ。

てもみをばかかむ。

有期の。

かぜふきなむ。

てもみをばかきてむ。

このな、ても、かのつぬの轉じたので、いますぐにとか、いつまで、にとか、今に近い期限を指定する詞である。このな、ては。すべて、この有期のは過去の、未來の、いづれも今に近いことをあらはす法である。

また、むかしは時の相で、かねて、自他をも明したものである。

自動の。

かぜふきぬ。

他動の。

てもみをばかかづ。

よどばあかづ。

いまだはこの自他の別はてにはでのみすることになつてゐる。

おぜがふいた。

よがあけた。

ておみをかいた。

よをあかした。

また、むかしは感情なり、結果なりを時の相にかねてあらはしたのである。よろうのことゝらは過去のことで。

一、結果をあかすの。

おぜふきたり。

ておみをばかきたり。

いまの國語で過去をあらはすたはこのたりから轉じたのである。さて、この結果の今につづくことをあらはす法に對しては、

あめふりき。

ておみをばかきき。

このきはまゝで結果も、なにも今につづかぬことをあらはすのである。

二、感情をあかすの。

おぜいたくふきけり。

ておみをばかきけり。

これは感情が今につづくことをあかすので、うの對は、

おぜいたくふきき。

ておみをばかきき。

かく、なにも今にのこらぬことをあかすまである。

また、むかしは進行現在というむたかしにうれと發達せなんだように思う。

きのふよりおぜふきたり。

けちよりおぜふきてをり。

かく、たりで進行現在でもおねてあらはしたらしい。またむかしは状態のど、動作のどと、きれいに、時の相のうへにもあらはしたものであつた。

おぜふちかち。 hi.

おぜふちかたり。 tari.

おぜふちかひら。 keri.

おぜふちかして。 ori.

これはいづれも状態のしるしには「おはひておる。おちいて」このほかのはいづれも動作のである。

おぜふちかぬ。

ておみまどば。ちかち。

しるし、いまだは「おみまどば」この「しるし」區別はすっかりなくなつてしまつた。

現在。おぜおふち。

進行現在。おぜおふちておる。

過去。おぜおふいた。

未来。おぜおふこう。

二、使動の相。

使動 とは使役してさせる という意で、せ、させ をはかせてうのころ
とあらはす。

さて、させは正格の動詞に、せは變格のにつく。

१- श्री

ほんをみせ。 mi-sa-se-i.

ほんをみさせた。
mi-sase-ta.

ほん　と　みせよう。
mi-sase-ou'

はん せ ちん せ せ
 misase-to-or.

三。

よま-せ-い.

ほんゑよめた。
yoma-se-ta.

ヨナセウ。Yona-se-ou.

ほんをよませてみる。
yoma-s'-teor

しかし、關西では、まだ、この使動のふるいいひあらはしめたところをつかうところ。

關西の。ほんとうです。yomas.

關東の。ほんぞよめせ。yomā-se-f.

使動の相の沿革。

むかしは使動の相はしめでいひあらはしたこともあつた。

こどもにあそばさしめけり。

もしは

こどもをしてゑさばさめつ。

しるに、今ではさるあらはしたはすたれてきたようである。

こどもにあそびさせた。

こどもにほんをよませた。

さて、この使動の現在のいひあらはしたは、いまでも、關西にむしかながりもある。

こどもにあそびます。

しる、このふいながりはしだいに東京ぶりになつていくようである。

こどもにあそびせむ。

三、所動の相

所動とは我が身の上に他が働きかけられる意である。さて、うことをあらはすにはられ、れのくつぞもある。

このられは正格の動詞に、れは變格の動詞につく。

一、られ。

ひとにみられむ。 mi-rare-ru.

ひとにみられた。 mi-rare-ta.

ひとにみられよう。 mi-rare-ou.

ひとにみられてゐる。 mi-rare-te-or.
二れ。

ねこもいぬにみられた。 kama-re-ta.
やうていぬにみられた。 kama-re-ou.

所動の相の沿革

むかしはえをばかせて所動の相をばいひあらはしたものである。

一、えをくつにはかせたの。

ころえぬ。

しかし、このいひあらはしかたは今ではまるですたれたようである。ろのまはりはられ、れであらはしてゐる。

一、られ。

つちまひられた。

二れ。

ころされた。

されど、このれ、られは能動のとみえらるゝ。今では能動のはであるでいひわけてゐる。

所動の。

すぐにつかまえられる。

能動の。

すぐにつかまゐることゝできた。

四、能動の相

能動とはできるといふところをあらはす相である。この能動の相をあらはすにはれ、られの二ようがある。

さて、このられは正格の動詞に、れは變格の動詞につくのである。

一、れ。

よくよめれる。 yoma-re-r.

よくよめれた。 yoma-re-ta.

よくよめれよう。 yoma-i-e-ou.

二、られ

よくおぼひられる。 obo-e-rare-r.

よくおぼひられた。 obo-e-rare-ta.

よくおぼひられよう。 obo-e-rare-ou.

能動の沿革

ずっとふるくは能動をいひあらはすにはえというおむりをばきせた。しかし、うれもおほくは否定のときに限つたようである。

えゆかず。

これは少々おはつて今でも關西になほのことである。

いうゆかぬ。

中むかしになつてはえというくつをばみせて能動の相をいひあらはすようになつた。たゞし、うれも否定のときに限つたようである。

ゆきえず。

これは今でも關東にのこつてある。少しはくづれてあるものの。しかし否定のときにも肯定のときにも。

いけぬ。 ik-e-n.

いける。 ik-e-r.

しかし、この二とほりのいひあらはしがたはそれぞれ欠点があるようである。

今の關西のは否定のときにしかつかいようのないのが欠点であらう。また、關東のは否定のときにも肯定のときにもつかはれて一だん進歩してあるものの、なほ、欠点がないでもない。

うれはおぼえ、おしえ、みねなどの詞には能動のと、能動ではないのとの區別がたたぬ点で。

よくおぼえる。

かゝるわけから今ではこの關東、西のいひようがしだいにかはって東西を通じて重にられ、れで能動をいひあらはすことになつてきた。

みられる。

みられぬ。

よまれる。

よまれぬ。

しかし、これとても所動のとまぎれやすうて區別がたちにくいから、今ではならにできるといふことは別にてきても。

いられる。

いくこともできる。

いられぬ。

いくことはできぬ。

そして、ずっとむかしは所動と能動との區別はなかつたものらしい。

五、敬語の相。

この敬語にはその人の身分に對するのと、その人の動作に對するのと二ようある。

一、身分に對するの。

この身分に對するのにも現に存命のものに限る。

天皇、皇后、皇太后には 陛下

皇族には 殿下

五位から上の方には 閣下

これは陸軍では將官以上、地方官では知事以上の人々をば閣下といはせてゐるから、まづその邊に見當をつけての私の存じである。

通常の人には くん、さん、どの、

この外に官、位などを稱するのにも一種の敬語と見てゐるらしい。

二、動作に對するの。

これはられ、れでいひあらはすのである。

せんせいはきみのてをみをやまれた。

ていねいにおしえられる。

敬語の沿革。

身分のある人は何ごともおれと手を下してせられることは少ない。おほくは人にさせられるのである。使動の相をかりてむかしは敬語の意をあらはしたものである。

一、使動のをかりて敬語にしたの。

いたくいからせたまう。

よくおしへさせたまう。

ふかくかんびへしめたまう。

また、身分のある人は權勢がつよいところから、貴い人は何ごともおれとものとして、やめて、うのできる力をあらはす能動の相をかりてうのまま敬語につかうのは今のありさまである。

二、能動のをかりて敬語にしたの。

たしかにみられた。

あなはいつもほんをよめる。

おて、この二冊重ねてもつもうことはむかしはあつた。

いつもよくほんをばよませう。

されど、この重ねるいひあらはしは今でははやらぬようである。

敬語の餘説。

まいにちつづいてゐる詞はなにをきたないように、よのひとの思うはあなづち無理でもある。

それと反對にふるふい詞はふるければふるいほど、なにをうつくしいように思うのも、これもあなづち無理もないことであらう。

いま年代の順で例をとってみよう

きうわよいてんきだ。

きうわよいてんきです。

きうわよいてんきであります。

きうわよいてんきでござります。

きうわよいてんきにてなうらう。

きうわよきてんきにてはべり。

きうわよきてんきなり。

かくならべてみるとあたらしい詞ほどなにか無禮なようによのひとはいうが、しかし、わたしはかならずしもさうとも思はない。

またわが國の人はふしぎに耳ごほい詞をなるべくたくさんにつかうのびえらいように、禮法にかなうように思うてゐるらしい。

けさわめずらしくよいてんきです。

今日はめずらしい好天氣です。

今朝わ無上の好天氣です。

かくて、なるべく漢語たくさんのもいさまいとが、うつろいとがいうが、しかし、わたしはかならずしもさうとも思はない。

かの敬語に關するよの人の考もいくらかはわかるたぐいではあるまいが。なるべく耳ごほい、時代のふるいことばが敬語であると思つてゐるのではあるまいか。

そのわけは身分に關する敬語は別として。動作に對する敬語は別。

それだけではなからうか。

でんかわスマはいきました。

エギリスのてんしわこのあいだしにました。

このまずは敬語であらうか。

でんかわスマえいかれた。

エギリスのてんしわこのあいだしなれた。

これにはまずはない。よし、なうても十分の敬意はつくされてはあまいか。

もし上品な詞づかひを敬語というならば、敬語は限のないものである。

エギリスのてんしわこのあいだおかくれになった。

エギリスの女皇陛下わこのあいだおかくれあそばした。

エギリスの女皇陛下わこのあいだ崩御になった。

エギリスの女皇陛下にわせんじつ崩御しました。

かくて、上品ないひまわしには限がない。いくらでもいひようがある。かくれる、崩御などいうは、それはしぬの敬語ではあるまい。ただ上品な詞づかいとしめいはれよう。

この上品な詞づかいはある特別な社會にのみ用ゐられるもので、この特別な社會の詞づかいをさして敬語とはすこしうけとられない。なほこれは代名詞にもあることで、たとへば。

わたし

わたくし

拙者

小生

これらもとはいひかなわけから出来たにもせよ、いまはただ一人稱の代名詞で、その間になにも敬語とか謙讓とかいう意は今はないの

である。

さて、これにつづいてご、おなどを敬語というがそれもいかゞはしいことである。

きみの なまえわ。

おなまえわ。

ごせいめいわ。

このご、おはきみのとおなじいいみで、つまりごおは代名詞狀形容詞とみてよからう。

しかし、ここでもよの人は一ばんあたらしい明治の世のことばづかひを一ばん無禮なようにいうのはいかなわけであらう。

みかみはみひたいにいはせり。古事記

このみはるのという代名詞狀形容詞であることをみい。

そのかみはるのひたいにいはせり。

また、つうれいぞんなはさつまいうぞ。
わさつ。

というてさるゝ、このおはただ詞をうつくしうするにつかうかむりである。

いったい、わが國語では主なしに動詞をつかうこともおほくある。かゝるざりにはそのはなしての人稱を明にするために國語に一種の詞おできてきた。

さつとたずねていきます。

さつとたずねていくでじう。

さようでくぢる。

さようでくぢる。

いせにもおもしろくさうらう。

いせにもおもしろくはべり。

これらはみな對話のときの詞づかひで、ただはなしての一人稱であることをしめすだけのもので、なにも敬語の、敬意のことばはないのである。

自稱の、第一人稱のはこれにおいて、さて、第二、三人稱の對稱代名詞の用をする詞は、

自稱の。ざりざりはうたよみたまふ。

對稱の。ざりざりはうたよみたまふ。

われもきみにという意のは。

つゝしみていはいたてまつる。

つゝしみてことばさまつる。

なにはさておいて、このありむたい明治のみよのことばをなによりもきたないように、いやしいようにおもうもののおほいことはじつにぞんねんである。

さて、動詞にその主の代名詞をふくめるのはあなうちわが國語ばかりではない。

命令の相。

命令の相には二通りのいひがある。

一、命令としての。

mo't shizkani yom-i.

Are wo mi-i.

Are wo mi-ro.

いふや命令の相であつてゐる。ただし、正格動詞はろとはせず、この命令の相であらふこともある。

二、希望としての。

mo' i'pen osie-te.

Cho't tsukai ni i'te ki-ie.

この希望のいひがある。

なほ、疑問のいひがある。

ちとあそびにこないか。

すこしおしえてくれんか。

命令の相の沿革。

むかしは命令はくつ e.o. でいひはらわした。

Shizka-ni yom-e.

Are wo mi-o.

Shikari oboe-o.

また、希望の意もよくてが。

Shizkani yom-besi.

しかしこのくつがくつとなつて關東にのこつてゐる。

Shizkani yom-bei.

しかしこのくつには命令のも希望のも未來の意も *yom-bei* である。うちは見わけねばならぬ。

また禁止の意もあらはすには。

Hon wa na yomi-s-o.

さて、この *na* はうちがしきであらはず副詞で、は命令の相をあらはすくつである。うして、この *na* はよみを動詞にしたしうで、このは命令のしきである。

これらはみなむしきの命令のいひあらはしかたであつた、がいまはうきにいうたときくにいととばかりになつた。

Asu kite mi-i.

Asu kite mi-i.

Asu kite mi-te.

Asu kite mi-te.

この外におもひに關東で。

Asu kite mi-ro.

Asu kite mi-ro.

また、禁止のくつはくつといひあらはしたはすこし妙である。

そんなものゐやむな。

Sonna mono wa yom-na.

ここはただのうちけしではないというところである。また、さういうところゐないではない。

うんなものゐやむない。

Sonna mono wa yom-nai.

しつこくしてはたゞのうちけしも、禁止のうちけしもおなじくないで、うの區別もたたぬから、禁止のはこの「ぞ」はぶいたものと見ぬ。されば、うけあひの命令は「ぞ」はくところぞ、うちけしの命令では「ぞ」はぬのである。

Are o mi-i.

Are wa mir-na.

なほ、正格の動詞は禁止の命令のときには動詞のくつぞはくのぞ

みい。

正格の。

うんなことゐおしひるな。

Sonna koto wa osier-na.

變格の。

そんなものゐやむな。

Sonna mono wa yom-na.

七、否定の相。

うちけしのころをあらはすのをば否定というのである。

この否定のころはてにはとくつをかりて明してを。さて、否定のくつはない、ぬ、なん、なかの四である。

一、ない。

いぬでわなない。

このうけあひのは、いぬである、である。これもうちけしになるとでのしたにわのつくと、あるぢないとおはるのもこの否定のしである。

二、ぬ。

いぬがをる。

いぬをかう。

これをうちけしにするとてにはが、ををわとなるし、さて、うちけし

のくつんがうるのである。

いぬわおらん。

いぬわかわん。

かくてない、ぬの別はてにはでのしたにはない。が、をのしたにはんというぢきまりである。しかし、これは重に關西の風で、關東ではで、が、をの區別なくみなない一でうちけしをあらはすのである。たゞし、うちけしのと時にはわ、というてにはをつかうのは東も、西も違はぬようである。

いぬでわなない。

いぬわをらん。

いぬわをらない。

いぬわかはん。

いぬわかわない。

この外に關の東、西での違ひなほ一ッある。

關東の。

ほんわよまなかつた。

關西の。

ほんわよまなんだ。

否定の沿革。

むかしは否定をば副詞でいひあらはしたのである。

このほんをばなよみそ。

このなは動詞よみを約束する副詞である。

さて、このながなんとなつて今もまだ關西にのこつてゐる。

このほんわみなんだ。 mi-nan-da.

また、かのなじはこのなをば動詞に。しも状態をあらはす動詞にしたのである。

ほんはなじ。

Hon wa na-si.

このsはnaを動詞にしたしゝゝで、なじはこのnasとらう動詞を状態の動詞と明すためのものである。

今ではこのnasiがnaiとなつてゐる。

動詞の總説。

わが國語には活用ということはない。形容詞にもないし、動詞にもないものである。

oshie-r.

おしえた。
oshie-ta.

oshie-ou.

この「時相」は時の相のくつである、けして活用ではなからう。

このたしねが語根であるしるしには、活用もないしるしには現在でも過去でも未来でもすこしも變つておらない。

國語は語根にさまざまのくつをはひせて、さて、それぞれの品詞も、それらの相をもいひあらはすのである。

おしえる。
oshie-r.

おしへさせ-
る。oshie-sase-r.

おしとられ。 oshie-rare-r.

おしえ させられた。 oshie sase-rare-ta.

動詞は、まづ、おのゝかりで、どの相とつゞけても語根はすこしも變化しない。

この *sase* や *rare* は動詞の活用とは *まづ* にいはれない。

さて、これはわしるゝ、みるなどの正格動詞ばかりではない。變格動詞でもおなじいことである。

ほんぢや。 yom.

ほんをよんだ。
yom-da.

ほんやう。 yom-ou.

づくて、變格動詞では現在の相をつくるところが正格動詞とちかうばかりである。語根は過去につづけても、未來につづけてもすこしも變

らなり。

これも時の相のうへばかりでななり。

よみせむ。 yoma-se-r.

よめれた。 yoma-re-ta.

よめせられよう。 yoma-se-rare-ou.

たゞ、この變格動詞にゐて yoma のゐのように母韻を隨伴することもある。しかし、これは活用ではない。

いいたい、この正格動詞と變格のともちぎうところは相のつづけかたである。

すなはち、現在をつくるうへに、變格のは現在をあらはすくつゝはぬところも正格のともちぎう。

正格の。 變格の。

mi-r. kak.

現在。

aboe-r. yom.

mi-ta. kai-ta.

過去。 oboe-ta. yon-da.

mi-ou. kok-ou.

未來。 oboe-ou. yom-ou.

あゝ、正格のは rare, sase といひあらはすところを、變格のは re, so であらはすのと、また、變格のは母韻の隨伴音を生ずるところとも正格のとはちぎうてんである。

正格の。 變格の。

使動。

mi-sase-r. kaka-se-r.

oboe-sase-r. yoma-se-r.

所動。

mi-rare-r.	kaka-re-r.
oboe-rare-r	yoma-re-r.

しかし、この随伴音のであるのはなにもふじきはない。かの變格の動詞
はいつも子韻でむすんであるからである。その子韻がすぐとゐるや
には發音上つゞけにくいから、そこへ一ッ母韻をはさんだのであらう。
その証には變格動詞が過去のすにつゞくきよを見てもわかる。すの
すぐうへの子韻はきと母韻にかはるか、母韻を伴なうから。

kak.
 kai-ta.
 hanas.

もしはうの子韻をおとしてゐる。
ものゝうゐる。 III.

u'-ta.	u-ta.
tor.	tor.
to'-ta.	to'-ta.

しかし、その子韻が半母韻にかはることがある。そのときは母の半母韻になる。

yom.
yon-da.

かうしてみると、かの變格の動詞の隨伴音は決して活用ではないこともわかいう。

もし、活用であるならば、なぜ時をいひあらずに過去の相しか活用しないのか。

なほ、相を重ねるときに正、變格にすこしくちゆうところもある。
使動に所動を重ねたの。

正格の。

變格の。

mi-sa-se-rare-r.

kaka-se-rare-i.

かく、おかに語根につづく相だけに正、變格の相違がある。
また、變格動詞は相を重ねるときにかぎって現在のしるしをはくようになる。

正格の。

變格の。

iii-r.

kak.

mi-sa-se-r.

kaka-se-t,

mi-rare-i.

kakā-re-i.

また、動詞から名詞をつくるうへでもこの正、變格には相違がある。正格のは語根をそのままに、しはえ。をばかせて名詞をつくる。

[illegible]

よくおぼえ。oboe おぼえ oboe おぼえ。おぼえい。

ものをいふ。H. I. にえ H. I. がたぬ。

ものを見る。mir.
みえ。mie.
めぐる。meguru.

變格のは、一を
はかしてつくる。

ほん　よむ。　yom.
よみ　よむ。　yom-i

utsus. utsusi

ううじて、わが國語ははかせるくらいしないで、その品詞がちゃんとあるに
 わるのである。

語根、たのし。

一、形容詞のくつをはいて形容詞になる。
くつしい・くつらし。

二、副詞のくつをはいて動詞になる。
くるしくくらす。

三、動詞　くつ　を　はいて　動詞になる。
ひどくくるしむ

四、名詞のくっをはいて名詞になる。
くっをのめる。

このいく、む、みなどはけて活用とはいはれない。ただ語根を化してなにかの品詞にしたためのくつである。

また、おなじい 一ツの品詞でも、そのはくくつで意味の變ふことは動詞の例でいくだひかはなした。

時の。おしえた、 oshie-ta.

所動の。おしえられた。 oshie-rare-ta.

使動の。おしえさせた。 oshie-sase-ta.

能動の。おしえられた。 oshie-rare-ta.

敬語の。おしえられた。 oshie-rare-ta.

この一ツ品詞についてその意義をいろいろにとのえるのをば相というて、*おの おちおち*の品詞をつくくつと區別しておくのである。

この相や、くつは活用ではない。かのこれまでの國學者のいうてゐる活用とは全一のものではない。

これまでの國學者たちは五十音連圖にたよつて、やれなに行の動詞であるの、やれ何段の活用であるの、とやましようというてゐた、おけしてわが國語にはかのなに段活用、なに行の動詞などいうことはけしてない。その證據にはこの相や、くつはまるで五十音連圖と關係もないではない。

この活用のないのもわが國語の特質である。語根にくつをはめて品詞をも、相をもさだめるのも國語の特質である。

また、この語根だけでは詞にならぬのもおほい。この語根にくつをはめてはじめて詞となるのも、また國語の特質である。

語根。名詞。動詞。名詞。形容詞。副詞。

kan. kan-e.

Fu. Fu-e. Fu-k.

Tsu. Tsu-e. Tsu-k. Tsuk-i.

Mi. Mi-o. Mi-r.

Tonosh. Tanotai-m. Tanoshim-i. Tanoshi-i. Tanos'i-k.

したが一國語の特点は詞のなづかたが一こかないことである。すなわち詞のむすびはかへと動詞である。

おしへる oshie-s-i.

このsoのは命令の相のoである。その証は、

おしへる oshie-o.

おしへる siのsは

なす na-s-i.

のsである。このsはnaとoshieと動詞にすへてある。この証は漢語も動詞にすへてある。

勉強—s. 學問—s.

とす。そのsである。

F

—しるは、なす na-s-iとiはなすたかというに、これはありariとoriからでた類推である。

すべて、状態とあらはす動詞はiでむすぶようにとの自然の類推、統一の理からでたことである。

しるは、今ではna-s-iのsはsareてnaiとなつてある。

おしへる na-s-iはsはおしへるiのこたのに、かのariはiもおしへるて、したがってar, naiという形のちがった詞もできたのである。

かゝるわけから、このある、ないは二なづから動詞であるといふのである。かゝるわけで、今のない、むすのなは形容詞であるといふ説はうばとりにくし。

このある、ないの例から推して、すべて文のむすびは動詞であるといふのである。

うここにいえがある。

どこにもいえない。

あのいひわきたない。

このはなわうつくしい。

きをうる。

いえをかう。

くさをはえる。

ばなをさく。

かく、文のむすびはみな動詞である。さうして、いでとめてある動詞はどれも状態の動詞である。ある、をる、あるだけはその状態のうちでも存在をあかす状態動詞である。

さて、動詞は他の品詞へ歸化していくこともある。

一、名詞に。

yomi. よみ。

miyo. みよ。

二、動詞狀形容詞に。

これは名詞の上にすわって、その意を約束するところは形容詞で、主客をもったり、副詞をもったりするところは動詞であるから、かうは名づけたのである。

よくわらうひと。

べんきうをすくこども。

はなをさくじこう。

三、動詞狀副詞に。

これはてをはかせてである。

ものをにてくう。

てをみをかいてやる。

あめをふってきた。

これも主、客をもつところは動詞で、そうして、動詞の上において、その意を約束するところは副詞である。

また、ほかの品詞から動詞に歸化してくることもある。

一、名詞

おくしやぶる。

二、副詞

いやがる。

三、感歎詞

あはれがる。

あはれむ。

てには。

わが國語はてにはで動詞と名詞との關係をば明すのである。

この名詞と動詞との關係をば格というてをる。

さて、この格には二ある。

一、主格はがであらはず。

よがあけた。

この主と同格をあらはすてにははがである。

うしわかちくである。

このうしわかちくと全主である。一りのをばかしたとばでいひ

あらはしてをるだけである。

二、客格はをであらはず。

このをばわざに選擇したというところをあらはすてにはである。

よをあひす。

ちかみちをとる。

かくて國語ではうけあひのてにははで、が、をの三つしかない。
かく、この三つに、うちけしのわも加て、しめて四つである。

一。で。

うしはちくである。

うしはやじうでわない。

二。も。

はやよがふけた。

まだよわふけぬ。

三。ぞ。

よをふかした。

よわふかさない。

かくて、このうちけしのわはうけあひのに區別することをもあるところ

より、すべてとりわけて、提醒するという詞にはこのわを添へるようになつてゐる。

かぜわふくし、あめわふる。

これはかぜがふくとあめがふるとを對比したからである。かくものを對比するときはにはうちけしなからでもわをもちあることである。また、このわは名詞、代名詞、副詞にしかとはいはない。

名詞に。う わけものである。

代名詞に。わたしわしちぬ。

副詞に。ときどきわあらしもふる。

かくて、とりわけていうために、わで主格をいひあらはすこともあるけれど、わはかならずしも主格のしるしではない。

そこで、このわ、が、をはいまではあ、あ、おに變りかへてゐる。

watashi à shira-n.

yo á ako-ta.

Hana o mi-r.

このほかに、格の意義と他のをかねたてにはもある。
ぞ。たれぞたずねてきたか。

このずは指定の意もある。

も。わたしもいこう。

これはあれも、これともいふほどのところもある。さて、このは
主にも客にもつく。

主に。うしもかちくである。

客に。うしもかこうである。

かくて、格のほかの意をかねるてにはまばりあるときには、その
かねる意のてにはだけあらはれて、格のてにははあらはれぬ。

わたしもいく。

わたしばかりいく。

わたしもいく。

かゝるてにははこのほかにまだいくつもないでもない。

そこで、これまでおぼくてにはとてあつかうたものは副詞をつくる
ためのものもすくなくない。

ただしくいうと、格をあらはすのだけおてにはである。

一、副詞のはたらき。

副詞は動詞か、副詞か、形容詞かについてその意義を約束する詞で
ある。

一、動詞につく副詞。

よくはたらく。

二、副詞につく副詞。

きいじに よく はたらく。

三、形容詞につく副詞。

よく ふとったひと。

なほ、副詞は文の全体につくこともあつた。

いや、さうでわな。

うん、そのとおりである。

すべて、うちけしの意をあらはすには **もういや** と **うう**、うちけしの意をあらはすには **もううん** など **うう** のであつた。

二、副詞のまたち。

副詞の **うう** と **はく** 詞はみな副詞であつた。

一、く。　　よく はたらく。

このくは關東ぐりで、關西では **う** と **うう** であつた。

よく はたらく。

二、も。

あつたは **あつた** も **あつた** 。

あつたは **あつた** も **あつた** 。

三、し。

うた **うた** し **うた** し。

あつた **あつた** し **あつた** し。

四、に。

五、　　あつた **あつた** し。

あつた **あつた** し **あつた** し。

あつた **あつた** し **あつた** し。

三、副詞の意義。

意義 *いふ* *うた* 副詞には五つありあへむ。

一、時の。

きのふ *あめ* *おふた*。

二、處の。

*こゝ*に *ね* *お* *ねて* *ま*。

三、程の。

キヨウ *わ* *む* *や* *みに* *ま* *む* *く*。

四、様の。

*しずか*に *は* *し* *ま*。

こども *お* *が* *や* *が* *や* *ら* *む* *へ*。

五、數の。

こども *お* *いく* *たり* *も* *ま* *へ*。

いぬ *お* *ひつ* *ま*。

この *いく* *たり* *や* *ひつ* などは數詞とらうて *ま* *へ* *ひと* *お* *あ* *ま* *お*、實は副詞である。

六、うけこたへの。

うん、*わたし* *も* *いち* *ど* *みた* *こと* *お* *ある*。

いや、*まだ* *き* *いた* *こと* *も* *ない*。

七、比較の。

ね *こ* *より* *も*、*いぬ* *は* *いぬ* *を* *した* *う*。

この比較のふくしには詞のはない。いまは句の例をだしてまへう。

副詞の總説。

副詞には句の副詞 *おほい*。

一、詞のはおもに一もづのくつをばく。

とんど *おほい* なり。

おういにうろたえた。

きわめてたゞしである。

ことごとくにげた。

二、二字のくつはくつとしてあつたものは、また意義 *おほい* である。意義のあるものは詞としてあつたのである。

この詞をば二、以上ならべて、一の詞の用をうとめたるものを句と云うべし。

いまから *おほい* 。

さうから *おほい* まで *おほい* してくだろ。

これよりも、あれ *おほい* しろ。

いぬ *おほい* しじんの *おん* を *おほい* せ。

この *おほい* には、

ばかり。

し。

と。

で。

え。

に。

おほい に *おほい* 。

し *おほい* し *おほい* は *おほい* 副詞 *おほい* 。

はなはだ *おほい* 。

うそぎわ やすきぞ あるいた。

さて、他の品詞から副詞へ歸化するのには、

一、動詞から。

うそぎわ やすきぞ あるいた。

また、他の品詞へ歸化していくのは、

一、形容詞に。

いろいろなものを見た。

二、動詞に。

はたらくことをいやる。

なにもない。

接續

接續詞には詞と詞とをつなぐのと、文と文とをつなぐのと二つある。

一、詞と詞との。

(一) に。 いぬに、ねこに、うさぎに。

(二) や。 いぬや、ねこや、うさぎや。

(三) やら。 いぬやら、ねこやら、うさぎやら。

(四) と。 いぬと、ねこと、うさぎと。

(五) なり。 いぬなり、ねこなり、うさぎなり。

(六) も。 いぬも、ねこも、うさぎも。

(七) か。 いぬか、ねこか、うさぎか。

二、文と文との。

(一) *あめわふくこ、あめわふる。*

おなじようなことをならべたてるとはしをもちゐるのである。

*むかし*はこれを*あういうふう*にいうた。

*あめ*は*ふく*、*あめ*は*ふる*。

これは *fur-i* の *i* に接續の意をもたせたものらしい。

Ame wa fur-i; kaze wa fuk.

(二) *あめ*は*ふる*、*あめ*は*ふる*、*あめ*は*ふる*。

この*が*は*うけあひ*と*うけあひ*とを一つなぐにもちゐるのである。
*むかし*はこれを*あういうふう*にいうた。

*あめ*は*ふれど*、*あめ*は*ふれど*。

(三) *あめ*は*ふる*、*あめ*は*ふる*、*あめ*は*ふる*。

この*けご*は*けご*の變化であらう。

(四) *あめ*は*ふれど*、*あめ*は*ふれど*。

この*ば*はそのことを必出來する事實と假定してのいひようである。
もし、或は出來する*あめ*しれぬ事實と想定してのいひようはたらであらはず。

(五) *あめ*は*ふつたらば*、*あめ*は*ふつたらば*。

*むかし*はこれを*かういうふう*にいひあらはした。

*あめ*は*ふつたらば*、*あめ*は*ふつたらば*。

*うへ*した*まし*とかけあわせて、或は出來する*あめ*しれぬという想定の意味をばあらわした。

(六) *あめ*は*ふつたらば*、*あめ*は*ふつたらば*。

このには既に出來した事實を出來せなんだものと想像して説いたものである。

*むかし*はこの意義を*かういうふう*にいうたものである。

*あめ*は*ふつたらば*、*あめ*は*ふつたらば*。

て、このむすびのをは省くこともおほまつた。

(七)のに。 あめがふるのよ、ひもちうておる。

こののには彼と、是とわけあわぬというところもちで意外であるというところもちをあらはす接續詞である。

(八)て。 いつもあめがふって、おれがふる。

このてはさうしての意義である。

(九)と。 いつもあめがふるよ、おれがふる。

このとはとまという意義である。

接續詞の沿革

わが國語には接續詞が極めて乏しい。いや、實はあまり發達してやらぬ。むしろは接續詞の代りに全しい文をくりかへしたものである。

あめがふった。ふたがさほどのぬいもなかつた。

いかにほんわよむことはよむが、あまりおもしろうわない。

なごろは文のしりに接續詞を添へたものである。

あめがふるから、おれがやんだ。

このからは上の文につくのである。

これは今はすこしく變遷をかけてゐる、というのは文のしりにつかぬで、接續詞は文のあたまにつくようになりかけてゐるのである。

きのうわあらしがふいた、で、村落のたてもの、きなども損害わすくなくないそうである。

おもしろいので接續詞のすわるくらゐもまだ是ぞとたしかに一定

もしねるおまである。

感動詞。

感歎の意をあらはすものは感動詞である。

この、感動詞には上につくのと、下につくのと二つある。

一、上につく。

あ、おま。

二、下につく。

おま、うことね。

この上下のを重ねてつかうこともおほい。

あ、おま、うことね。

くつとあむり。

くつもとは意味をもった詞であつたのである。それが音のくづれで、いまではただくつとなつてしまったのである。

むおしは。

おほきなるけもの。

やせたるうし。

うまは。

おうきなけもの。

やせたうし。

かく、なるはなに、たるはたにくづれてしまつて。つまり形容詞をあらわすくつとなつたのである。

すべて、おのくつはあむるわけからしてできたものである。形容詞のでも、副詞のでも。

しかし、副詞にはまだまるでくつとまではなりきれないものがある。
ほろみでさる。

このではをもち、にてなどという意義のある詞である。
あすまでおいて。

いまからはじめる。

このまでも、おらもまだ意義もあるおら、くつとしてすぐに語根には
つづけにくい。

しかし、名詞と動詞とはこのくつも語根に熟してしまつてすぐと見え
けられぬのもおほくある。

それでもこのくつで詞をつくることはむづかしいおらの、國語の特質で
ある。されば、いかな外國語でも國語に歸化するときには、きつとこの
くつの法格をまよる。

ひどく力む。力む。

ひろく布令る。布令る。

突然とでかけた。

滔々とはなす。

壯麗なたてものである。

愉快なひと。

かく、形容詞、副詞、動詞になるにはわづ法則をほりにくつをはかねば
國語にならぬのである。

されば語根としておほく漢語をわづ國語は攝取したが、しかし、國語の
法格はほとんど整然と亂れないで今につづいてさる。

お、このくつもしだいに數おへてきて、またいくちはまるでくつと
はかぬ詞もできてきた。

くつをはかぬ形容詞。

あるひと。

くつどはかぬ副詞。

はなはだあつい。

これらはその詞のくらゐ、はたらきで品詞を定めるより外はない。ともかく、このくつの研究ができれば國語に活用のないこと、何行の動詞とか、何段の動詞とかいうことのないしだいもわからう。さて、おのむりはわが國語にはさまでの關係もないものである。

やすい。

なやすい。

たやすい。

もやすい。

かりやすい。

この、な、た、も、かりはむりである。このむりはあまり詞の意味を動かすものではない。

かのおとというむりもただ發音をやすくするくらゐのものである。

おとうふ。

おあさん。

そこで、わが國語は語根と、むりとあるけど、その主要なものは語根と、くつである。

ただし、むりでかのうちけしをあらわすのは少しく意味をかへる。

むほうもの。

ぶえんりよに。

ふとくぎな。

文論。

一、文の形式。

詞とは觀念を表したものである。

いぬ。

ほえる。

文とは詞を適當に排列して、さて、完全な思想を表したものである。

いぬもほえる。

いぬをかう。

さてこの文には

はなしの題目と、

その題目についての叙述と、

この二つも具はらねばならぬ。

そこで、この題目は名詞か、名詞のはたらきをするものか、つとめる

のである。

いぬもほえる。

じこうもわるい。

さて、この叙述は動詞がつとめる。

いぬもほえる。

あせもむい。

ともだちをたずねる。

しんぶんをよむ。

かくて、文には少くも題目と叙述がなくは完全な思想をばいひあらはされぬのである。

また、國語ではこの文のむすびはきつと動詞である。さうして、その動詞のうへにはきつと名詞か、そのかはりをつとめるものか、つとめることである。

いぬぞかう。

いぬがねこそおう。

しんぶんをよむ。

こどもがしんぶんをよむ。

かくて、わが國語では文を構へる形式が一しもない。

故十訓。

たつた、この形式が一しもない、

とて、國文は平板の弊もあるというのもあるわけである。

しかし、この題目を代名詞とつとめるときには省くことも多い。

このてもみをみた。

あ、みた。

かくみたとばかりいうて、その題目の代名詞をはぶくの多い、特

に提醒していはねばならぬときのほうは。

あ、わたしもみた。

二、形式の三様。

わが國語では題目をつとめる名詞と、その題目についての叙述をつとめる動詞と、この名詞、動詞の關係をば國語ではてにはで明してぞ。

で。いぬである。

が。いぬがほえる。

ぞ。いぬをかう。

かく、文にてには大切なことは、かの詞の研究にくつが大切なとおなじいことである。

このではおもに解釋をのべるときにふちめるてにはである。

いぬである。

それでよろしい。

さうして、解釋をするときの動詞はかならず状態の動詞である。

しゝゝ、このでと、でもってという意のでと混同してはならぬ。

こゝたなできた。

ふでであゝ。

たゞし、この状態の動詞のなかで、かの存在をしめす動詞だけはこのしたにつくこともあゝ。

それゝよろしい。

ひとゝあゝ。

あゝあゝ。

うゝあゝ。

また、が、をは動作を記述するときにもちめるので、そのしたにする動詞はきつと動作の動詞である。

うゝあゝ。

ひとゝあゝ。

はなゝあゝ。

あゝあゝ。

さうして、このをは他動をあらはすし、がは自動をあらはすのである。

さて、この自動ということとは、その動作が主者の撰擇の結果ではないということの意味するのである。

はなゝあゝ。

はらゝあゝ。

また、他動ということとは、その動作が主者の撰擇の結果であると

いうことを意味しておる。

ちがみちをとらる。

ばんをやる。

なほ、にであらはず**目的**は動詞の客とはあつかはない。これは一々の副詞句であらうとおもう。動作をむけていくところをしめすための副詞であらうと。

こどもいぬにばんをやった。

おやわくにに。

ミナトガリはくうぐにある。

そこで、あの

名十動。

の式はてにちをさかへて三とある。

いぬであつ。

！ 名十で十動。

いぬがほえる。

二 名十が十動。

いぬをかう。

三 名十を十動。

しるし動詞が文のむすびにあることはけしてちがはない。
この三様の式をうちけしの方からみると、

いぬである。いぬでわなう。

いぬがほえる。いぬわほひぬ。

いぬをかう。いぬわわぬ。

ちがみちのとちがみちをわなう。

しるしこのわは區別する意からして副詞にもつく。

あすわあめをふらう。

三、約束語。

完全な思想をあらはすものは文である。さて、この文は名詞と動詞と、それに名詞、動詞をつなぐてにはと、この三つがあれば、それで完全な思想はあらはされる。

はなしをする。

しかし、名詞、動詞、てにはだけでは精密には思想をばあらはしにくい。

そこで、約束語というものができてくる。形容詞や、副詞などという約束語も。

おもしろいはなしをする。

はなしをなぞくする。

なぞい おもしろいはなしをした。

じつになぞい おもしろいはなしをおりおりする。

かく、約束する詞はいつも約束される詞のうへにきとすめるのも國語のきまりである。

わが國語の平板に流れやすいのり、變化に乏しいのも、これらのわけあいからではあるまいか。

たゞし、このきまりをば副詞だけはとぎとぎ脱することもある。

ながくはなしをした。

四、分詞のこと。

約束語は形容詞と、副詞とである。

さて、名詞には形容がつくし、その形容詞には形容詞、もしくは副詞がつく。

うつくしいえ。

おほきなうつくしいえ。

めづらしくうつくしいえをみた。

また、動詞には副詞 *おつく*、*さて*、その副詞には副詞 *おつく*。

よくはたらく。

まことによくはたらく。

お、この約束語には分詞という *お* あつてすこしくみわけにくいこと *お* ある。

さて、この分詞は二つの品詞の性質を *お* かねてゐるものである。

一、動詞狀形容詞。

よくはたらく *しるべ*。

よくという副詞のつくところは動詞で、*しるべ* という名詞のうへにすわるところは形容詞である。

よくしごとをすること *も*。

名詞 *こと* *も* を約束するところから、このするは形容詞である。*さうして*、しごとという客を *もつ* ところは動詞である。

二、動詞狀名詞。

きまつてはたらくの *お* よい。

きまつてという副詞をとるところは動詞で、よいの主となるところが名詞である、このはたらくのは。

三、形容詞狀名詞。

じつにたかいのをこつた。

名詞の *くつ* の *を* はいて *を* るところは名詞で、副詞 *じつ* に *を* *もつ* ところは名詞である。

お ける分詞をそれと見わけると、*お* には詞の *くらゐ* *お* きわめてたいじである。

五、詞、句、節、文。

一ツの觀念をば一のことばで表はすのは詞である。

ちいさな。

たくさんに。

一ツの品詞のはたらきをば二ツ以上のことばで表はすのは句である

形容詞句。

わたしのうちのいぬ。

副詞句。

わたしのうちにおる。

きみのいぬがきょうから、わたしのうちにおる。

もし二ツの品詞のことばで、一の品詞のはたらきをばあらはして、また、そのなかに動詞が加はつてゐるのは節というのである。

形容詞節。

わたしのうちにおるいぬわつよい。

副詞節。

わたしのうちにおくと、よくなじむ。

名詞節。

おぎょうをはげむひとがおほい。

そして、この句や、節は一ツの詞とおなじいはたらきをうつとめるものである。

六、文の主部と屬部。

完全な思想を表はした文には、きつと、はなしの題目と、さて、その題目についての叙述とがある。

この題目とば文の主部というのである。

さて、この主部をつとめるのは名詞か、名詞のめはりをつとめるものである。

約束語をもつ主部。

しろい うなぎ がおほ。

しろい おほきな うなぎ がおほ。

じつに しろい おほきな うなぎ をみた。

句をもつ主部。

わたしの うちの いぬ がおほ。

節をもつ主部。

うなぎ を おわせる かりいぬ がおほい。

また、文の主部には約束語も、句も、節もつたぬのものもある。

うなぎ がおほ。

しかし、この主部を代名詞がつとめるときははぶくこともおほい。

うん、うちに おほ。

さて、文の屬部は、主部の状態を、または動作をば明す部である。

状態の。 このいぬ わつよい。

動作の。 いぬ がおほ。

この屬部にも約束語や、句や、節をもつものがある。

約束語をもつ 屬部。

いぬ がおほく ほえる。

いぬ がおほやみにはげしく ほえる。

句をもつ 屬部。

うちのいぬがあらばんまでほえておる。
うちのいぬわとくよそのひとにほいつく。

節をもつ 屬部。

いぬわ おんを わすれぬけものである。

また、文の 屬部には 約束語も、句も、節も たぬの もある。
いぬが ほえて。

しおし、いちな 文でも、

お調 + 調詞。

の 式を はづれる の もないし、

約束する 詞は 約束される 詞の上 にすわる、
というきまりを はづれる の もない。

七。文の くみあはせ。

文の くみあはせ から 區別しては、文に、

單文と、

複文と、

合文と、

この三つの くみあはせ がある。

一、單文。

この單文というのは 主部、屬部が 一つづつしかないの をさしていう
ので、さて、約束語も 一つも、句も 一つも、そこには おまひはない
のである。

ておみぞあく。

なおい ておみぞよくあく。

このなおい ておみぞにどまであいた。

二、複文。

これわいぬで、あれわねこである。
あめわふるし、めざわふく。

この複文というのは主部なり、屬部なりといふところにあるのである。

あめめらばんまで あめわふるし、よるのよなめまで
めざわふく。

三、合文。

いぬわおんをわすれぬけものである。

うさぎめりにつめういぬめほし。

この合文は主部なり、屬部なりに節をもつてゐる文である。

主部に節をもつ。

いぬわよをまゐるけものである。

屬部に節をもつ。

めざわめはげむものわよくさめ。

主部にも、屬部にも節をもつ。

わたしめこうておるねこわよくねずみをとる。

しかし、合文でも、複文でもただ單文を少しく變化したものである。されば、よくよく分解してみると單文になるのである。

八、文體の別。

文の体制からして區別すると、文には

叙説體、

疑問體、

命令體、

咏歎體、

この文體があるのである。

一、叙説體の。

これは事實を、もしくは想像をいひあらす文である。

(一) 事實の。

ねずみがたうたる。

(二) 想像の。

ねこをかうたればよからう。

二、疑問體の。

これは答解をまつ文である。

あれわねずみか。

あれわねずみでないか。

三、命令體。

これは希望なり、指命なり、禁止なりをいひあらす文である。

(一) 希望の。

しばらくまて。

(二) 指命の。

しばらくまて。

(三) 禁止の。

しばらくななな。

四、咏歎體の。

これは驚異の情をいひあらす文である。

ああ、あふなりこと。

ああ、あふな。

し、この咏歎なり、命令なり、疑問なりの文は、つまり、叙説體の變

體にすぎぬのである。

疑問体の沿革。

疑問の意を明にするはかという詞をかるのである。

これはきみのほんか。

このかをはくところもこの疑問体の、叙説体とちがうところである。

しかし、なにの詞もあるときには疑問体のしるしのかをばはぶくこともある。

このほんはたれのか。

このいぬはだれの。

いま一ッこの疑問体の特異な点はあるをたはくはぶくことである、
がのうへには。

叙説体の。

ヨシタさんのことである。

疑問体の。

ヨシタさんのことか。

しかし、この點は時ちがうと、このきまりもやぶれるのである。

もとからきみのであったか。

また、うちけしるときにはこのきまりもはまらぬことである。

きみのいぬではない。

きみのいぬではないか。

これまでは今の國語の疑問体のことで、これからは昔の國語の疑問体のことをはなそう。

むかしは疑問の意をば

か、

や、

でいひあらはしたものである。

あ。

なにの類の詞のしたにはいつてもあつた。ときにははばくこともないではないあ。

あれはなにあ。

いづれをばと。

このなにの類の詞のしたにはかをば逆にはらむことあ。

いづれをかと。

いつか。

あ。

このやは二重の問のときにもあ。

このくにはあつるものありや、なしや。

また、うちげしずのしたにも。

あひとをしらずあ。

また、未来のむのしたにも。

あすも、あめふらむあ。

いまはこのやはまるでなくなつて疑問の意はなんでもかで表はすことになった。

なほ、ここに「一」いうて来きたいのは今のも、昔のも疑問体のいひあらはしむ轉じて希望の意をばあらはすようになってゐることである。

むあしの。

はなみあてらにちとたづねたまはずあ。

うまの。

はなみにでもいかないか。

ともあく、この疑問体の特異の点は、

かを文のむすびによつこと、

かのうへにはであるをはぶくこと、

こちらが、あの叙説体とちがうところであらう。

命令體の沿革。

いまは命令體は、

い、

に、

ろ、

て、

な、

この五つで指命なり、禁止なりをばいひあらはしてぞ。

あれぞみい。

むこうをみろ。

ちときたまえ。

そんなになむな。

し、いはは希望の意をいって命令の体をばなるだけ、ちげふう
あ。

すこしづかにして。

い、すこしづかにして、さうたい。

すこしづかにせむか。

このかは疑問体も變して、命令體になつたのである。
むしは、し、この命令体をば、

o. せ、せ、せ、あ、あ、あ。 ark-o.

i. せ、せ、せ、せ、せ。 kaeritashi

o. あれぞみよ。 mi-o.

でいひあらはしたものであ。

また、禁止の意は副詞なをかりていひあらはしたのであ。

なよみそ。

na yomi-so.

このよみはよむを名詞にしたのである。それに動詞のしるしをばはかせて動詞にしたてて、さて、命令のしるし。をはかせて命令体としたのであらう。

しるし、このふるい。のしるしはいまはれはまたはつちはなくなた。
お、すこしこれににによったのは、

もといねいにをみてみる。 miro

ともかくも、この命令体の特異な點は、

い
ろ
え
て
な

などのくつをはくところで、そこが叙説文とはちがうところであらう。

詠歎体の沿革。

この詠歎体はむかしもいまもづつにこれぞという變りもない。

一、語根をそのまゝつめての。

あゝ、いた。

れた、くるしや。

二、いひをそつての。

あゝ、いたいこと。

れた、くるしこと。

この詠歎体には感動詞おうへ、したにつくのう。つちぬのう。あゝ。

いやなことよ。

まあ、つまらないわ。

おかしいこと。

かくて、この咏歎体の特異の点は

語根をそのままにつづうこと、

こころしはごころうこと、であるをはぶくこと、

こころもことに注意せねばならぬところであらう。

叙説の、

まことにくるしいことである。

咏歎の、

なに、くるしいと。

まあ、くるしいこと。

これ、くるし。

叙説体の沿革。

この叙説体のなかには、

直説法と、

假定法と、

この二とほりの叙説法があるのである。

一、直説法。

この法は事實を叙説するのにつづう。

二 あめがふると、あぜわやむ。

これはあめがふるといふを、必然の條件としての判断である。

あめがふれば、あぜわやむ。

これはあめがふるといふを、或必然の條件としての判断である。

この判断にも断定のと、推定のとがある。

断定の。

あめがふると、おぜわやむ。

あめがふれば、おぜわやむ。

推定の。

あめがふると、おぜわやまう。

あめがふれば、おぜわやまう。

二、假定法。

この法は想像を叙説するときにつかう。

あめがふつたらば、おぜわやまう。

これは、万一にも、あめがふつたらという、一の想像を條件にして
さるのである。

あめがふつたらば、おぜわやむのに。

これはいままでのあたりには、あめはふつたらぬし、おぜはふつたらぬ
ことといひあらはしてさるので、つまりまるで事實を反對の方

面を叙説してさるのである。

さて、この直説法はむづかしい、いまでも變りはないが、この假説法は
今のは、いづれがむづかしいのとはちがうてさ。

假定の。

あめふらば、おぜはやまむ。

あめふりなば、おぜはやみなむ。

想像の。

あめふらまじおば、おぜはやままじ。

まへの假定のは、ふりはせまいが、もし萬一にもあめがふつたらと
いう假定の條件を設けての判断であるけど、この想像のはおもしろい、
ふりはせまいが、などという意をばさるでもたない推料である。

このまへの推料の文はうへ、したにまじのおけあはせもあるのは
その特異の點である。

三、反事實。

あめしふりせば、かぜはやみなまし。

これはまるで事實の反對の方をいひあらはしてゐる文である。すなはちあめはふらぬし、かぜはふくし、という意を叙説してゐる文である。

また、いまはにというところをむかしはをというたものである。

いまの。 あめびふつたらば、かぜわやもうに。

むかし。 あめしふりせば、かぜはやみなましを。

いづれも、さておぜのやまぬことよ、などいう詠歎の意も、いくちかはあるのである、かくに、ををばくときのは。

さて、この叙説体の文が他の体の文とも違うところは、文のむすびである。

叙説体の。

あすわしごとをやすむ。

疑問体の。

あすわしごとをやすむか。

詠歎体の。

なに、あすわしごとをやすむと、

命令体の。

あすわしごとをやすみい。

いづれも、叙説体よりほかのは文のむすびに特別の助辭をばくのが通例である。

九、詞を逆にならへること。

わが國語では約束する語は約束される語のうへにすわるのも動かぬさまりである。

おうきなやま。

じつにめづらしいおうきなやま。

おうきなやまがある。

めづらしいおうきなやまがたくさんにある。

しかし主部、屬部のくらゐは動くこともある。すなはち破格のならへたものもないでもない。

正格の。

おうきなやまがたくさんにある。

じつにおうきなやまがめづらしいたくさんにある。

變格の。

たくさんにある、おうきなやま。

めづらしくたくさんにあるわ、じつにおうきなやま。

かくて、變格では主部がしたになって、屬部がうへにすわるのも正格のと違ふところである。

かく、詞を逆にするのは叙説体におきるわけではない。

疑問体。

ここわなんというところ。

なんというところか、こゝわ。

咏歎体。

ああ、ひびのさびしく。

ああ、さびしく、ひびの。

この咏歎体の主客にはつうれいのかというてにはもあることを注意せよ。
命令体。

すぐこのでぢみ^ぢをだしてくれい。
すぐだしてくれ、このてぢみ^ぢを。

なほこのほぢ^ぢに、おほく、その定^ぢまったくらゐをはなれるのは副詞である。

きうわひどくをむく。

ひどくきうわをむく。

ひどくをむく、きうわ。

十、詞をはぶくこと。

はなしをするにも、ぶんをかくにも詞をはぶくこともおほくある。

一、動詞をはぶく。

これはなんというとり。

みみずく。

こちらはみみずくで、あちらはふくろうである。

動詞のうちにもである、もしくはあるははぶくこともおほい。

二、名詞、もしくは代名詞をはぶく。

ここらにはみみづくわおらぬ。

いや、おらぬ。

おとさんはうちにおられる。

うん、うちにおる。

これらは名詞もはぶかれたとしても、代名詞もはぶかれたとしても、

いづれでも、おしひくはなぬらう。

わゝ國語では動詞はきつと主格とば、名詞か、代名詞の主格辭をもたねばならぬというおしひはなぬらう。

わゝ國語には代名詞の發達せなんだからでもあらう、わゝゝ動詞のつかいかたのあらのは。

三、いづれおおきく。

“おしひくはなぬらう”の。

わゝゝの、こゝ“おしひく”の、おしひくはなぬらう。

わゝゝ。

“おしひくはなぬらう”の、おしひくはなぬらう。が、おしひくはなぬらう。

watashi a jitsni koma'teor.

“わたしは、おしひくはなぬらう”の、おしひくはなぬらう。

四、いづれおおきく。

“おしひくはなぬらう”の、おしひくはなぬらう。が、おしひくはなぬらう。

Tski ga akak-, kaze ga suzushi-i toki.

“いづれおおきく”の、いづれおおきく。が、いづれおおきく。

Makotoni teinei- shinsetsu-na kata.

“いづれおおきく”の、いづれおおきく。が、いづれおおきく。

“いづれおおきく”の、いづれおおきく。が、いづれおおきく。

Se ga takak, yok futo'ta kata.

“いづれおおきく”の、いづれおおきく。が、いづれおおきく。

けど、おほめた、おなじいたちのことばをきかねるときには、うへのは語根をそのままにつもうという一種の類推であらう。

十一、詞のわけかた。

詞をわけないで文をかくとよみにくくもあるし、わかりにくくもある。

さて、詞をわけるときには二つの綱目がある。

一、意義のないくつははなし。

これは詞のうへにあてはまる。

接續詞。よいのもわるいのもある。

名詞。はなし。を。

形容詞。おもしろいはなし。

動詞。

きく。

副詞。

ときどき。

てには。

おもしろいはなしをと。

二、意義のある詞ははなし。

これはおもに句にあてはまる。

あきからばんまではたらく。

かたなで。

それさえあればよろしい。

たゞし、分詞になつてはこのことはわたしにもまだ定見がない。

形容詞狀名詞。もうとよいのを。

動詞狀名詞。やさしいほんをよむのを。

動詞狀形容詞。よくべんきうするひとである。

動詞狀副詞

すこしもしづかにもった。

ひどくなげきおなした。

こちたなをあしてくれい。

これはれもに節に關するきまりである。

あて、いみのある詞ははなすのはいうまでもない。

もつとよいしなをくれい。

ほんをよむことはきらいでわなう。

十一、聲調のこと。

言語のよとは音である。

この音を調節して、あて、詞をでせるのである。

あて、この調節ある音をつらねると、そのあいだにおのづから聲調をあててゐる。

詞の意義はこの聲調によつてあつてゐることをおぼくある。

あて。 Kaki.

あて。 Kaki.

あて、きに力をいれていうときはあてあひのあきで、あてないときはあての實をあらはしてあて。

この聲調は同音異義の詞をば造る用ばかりでもない。あてのシナなどは品詞の別あてもおぼくは四聲というこの聲調でいひわけてあて。そこで、あて國語でもこの聲調は言語の足らぬところを足して、思想

の交通を助けることは少くではない。

おつゝ、わが國語ではこの聲調はつうれい語根にある。

よつゝ ひと。

Yo-i hito.

よへ ちやへ。

yo-i kaseg.

よへ この語根「ふんづり」もある詞であれば、この最後の「づり

にこの聲調「あへ」。

あへ じへ。

Waru-i jikoo.

じへ ぢへふふ。

Jitsu-ni wakara-nai.

じへかに あへ。

Shizka-ni aru-k.

これは形容詞や、副詞だけではない。名詞でも、動詞でもやはり語根にこの聲調「あへ」。

し ぞん ぢへ。

Isoi-de yo-m.

よへ ぢへふ。

Yo-k hatara-k.

あへ ぢへ あへ。

Fu-e wo fu-k.

あへ ぢへ あへ。

Kan-e wo ho-r.

なほくつゝも重なうあるときには、かの聲調はやはり最後のくつのまへ、第二の語根のむすびにある。

語根。 おう。

おうく くれた。

Oo'k kure-ta.

おうかん おうかん。

Ooki-ni ari-gatou.

このおうは第一の語根で、*おうく*は副詞である。この副詞を第二の語根として、*おうかん*はおこしらえたのである。

しらずん しるべん。

Shirazu-ni tsukawa-re'ta.

かの *しらずん* 聲と *な*、*しるべん* 聲と *あ*、*ひく* 聲と *は*、*じつ* はこの聲調の所在 *おこしらえた* の *じ* が *おこ* である。

おへん こ。

Ki't ko-i.

あしへん かへん。

Cho't na'te.

あし *あ* *ごうん* と *な* である。

Kane ga goon't na'ta.

すこ *こ* *あ* *く* である。

Skoo'shi okuikre-ta.

この聲調は詞のうへばかりではない。文のうへにもある。

いかに *あ* *あ* の *あ*。

いかに *あ* *れ* *あ* *わた* の *い*。

これ *わ* *あ* *み* の *あ*。

あ、それもわたしのである。

これ *わ* *き* *み* の *あ*。

いかに、*わた* の *い* である。

これわきみのか。

いや、わたしのでない。

この聲調のありどころでさまざまに意義に變化を生ずることである。

十二、點法。

はなしできくときはわかりやすいというのはみぶり、おほつき、こわ
いろのたすけもあるからである。

おなじいことでもしつでよむとわかりにくいのは、おのみぶり、おほ
つき、こわいろのたすけもおほないからである。

かくて、言語を同じにうつしとると點法ということもきかなくては必要
になってくる。みぶり、おほつき、こわいろにおほつて、かくて、思想の斷續を
明にするために。

かくて、點には、

とまりてん。

どうてん。

くてん。

ぢうてん。

つなぢ。

わり。

ひっぢけ。

まづはこれくらいで大体は思想の斷續をば明に點出されよう。

とまりてん。

一、思想の完了したところに。

きのうはじつにこまつた。あめわふるし、かきわなしで、はらわ
いるわ、さむくわなるわで、じつにしんたいきわまつた。

つなぎ。

二つの詞をつないで一つの詞とするとき。

はくぶくしゅ。

一の詞を二行にまたがせてゐるとき。

—

ん。

このときには、もうもんなどせないようにきをつけたい。

わり。

思想のすぢみちがまるで、しかも、にはかにかわつたときに。

これわうし、あれわうまでーうしや、うまわいずれもいえにかうけものである。

ひ
っ
かけ。

ほかのひとのことになり、またはことわざなりをひいてかくとき。
「しうぢぎのあたまにわみやどる」。まことにこのひとのしうぢぎのけいれきわみやどってまたにちがいわなからう。

さて、思想の斷續は點のをしただけではまだどうぶんに明にしない。

この點法のほかに段落の分けたいきわめてだいいである。

十三、ちとことば。

作者の文をばちというし、その作者がほかから引いた文、もしくは書中の人物の談話をばことばという。

わたしというには。

あめがふつたらば、いかぬ、

というた。

ことばはちより一にあげておきたい。

あとにぎにいうなどのおなじい詞を重ねるのもわが國語のちがひ

である。

ことばをちちにうつるところにはどとちう詞をはかむのちがひである。

またかういうようにも。

わたし、

あめがふつたらば、いかぬ、

というた。

はじめのほうにはいうなどの詞ははかむともちかむとのちがひがある。

また、かくもいう。

わたしというには、

あめがふつたらば、いかぬ、

かういうた。

わたしも、

あめがふつたらば、いぬ。

かういうた。

かく、どこというところをばかうとすることもおぼくある。

また、かくもいうこともある。

あめがふつたらば、いぬ。

わたしもかういうた。

もし、引きぶみのなかにくらに引きぶみがあるときは、

わたしも、そのときに、

わたしも「わびみをしれ、ということわきいたこともある、

こうこたえた。

日本語典 終

附表 第一

で。解釋の。

叙述の。		對話の。	
うけあひ。	である。	デス。	アリマス。
うちけし。	でわなない。	デス。	アリマセン。
うけあひ。	で あつた。	デス。	アリマシタ。
うちけし。	ナリケリ。	ダッタ。	アリマセナシタ。
うけあひ。	でわなかつた。	デス。	アリマセナシタ。
うちけし。	である。	デス。	アリマシタ。
うけあひ。	でわなない。	デス。	アリマセン。
うちけし。	で あつた。	デス。	アリマシタ。
うちけし。	ナリケリ。	ダッタ。	アリマセナシタ。

注意一。叙述の段のカタカナノは中古文である。

二。この文を變化して練習してみい。

きヨウわやすみである。

附 表第二

び。自動の。

現在		過去		未來	
在		去		來	
うけあひ。		うけあひ。		うけあひ。	
うちけし。		うちけし。		うちけし。	
叙述の。	びー	わーない。	ハーズ。	わーない。	ハーズ。
	びー	ハーズ。	ハーズ。	ハーズ。	ハーズ。
對話の。	びーマス。	わーマセン。	ガーマシタ。	リーマセナンド。	ガーマシヨウ。
	リーマスマイ	リーマスマイ	リーマスマイ	リーマスマイ	リーマスマイ

注意一。關東でいるというところを、關西では、おるというてを

る。

二。がのしたのうちけしは、關東ではなか、關西では

なんというてを。

三。び。どのしたのうちけしで、關東ではないとい

てを。關西ではび。どのしたのはんというてを。

四。この文を變化して、練習してみい。

附

表第三。

ど。他動の。

現 過 未

在 去 來

叙述の。			對話の。		
うけあひ。	をー。	チバー。	チーマス。		
うちけし。	わーない。	ハーズ。	ワーマセン。		
うけあひ。	をーだ。	サバーケリ。	チーマシタ。		
うちけし。	わーなかつた。	ハーザリケリ。	ワーマセナンダ。		
うけあひ。	をーう。	チバーム。	チーマシウ。		
うちけし。	わーまい。	ハーマジ。	ワーマスマイ。		

注意

一。どのしたはうちけしを、過去を、未來をあらはすに
すこしもおのしたのとちがひはない。

二。おのしたのたは中古文のヌに、をのしたのた

は中古文のツによくあたる。

三。うちけしのしたのたはみなケリ、もしはキで譯
する。

四。この文を變化して、練習してみい。
じをぬく。

附

表第四。

形容詞のくつ。

ーな。	ちいさな	うし。
ーナル。	チイサナル	ウシ。
ーた。	やせた	うし。
ータル。	ヤセタル	ウシ。
ーい。	くろい	うし。
ーキ。	クロキ	ウシ。
ーの。	この	うし。
ーガ。	キミガ	ヨ。
ーツ。	アマツ	カゼ。

注意一。カタカナのは中古文のである。

二。お、ッはいまはなくなつたことである。

附表第五。

副詞のくつ。

いと。	ざつと	よむ。
いにて。	ていねいに	よむ。
いて。	よろこんで	よむ。
いく。	おうく	よむ。
いぬことば	ときどき	よむ。

注意一。この副詞は中古文のいおなじいことである。

明治三十四年三月五日印刷
明治三十四年三月十日發行

定價六拾錢

著作者

前波仲尾

發行者

矢内正



姫路市福中町七番地

著作權
登録

印刷所

大阪製本印刷株式會社

大阪市阿波座壹番町六十番地

賣捌所

金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目七番地